
朝山家の長男のとある物語

クラウディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝山家の長男のとある物語

【Zコード】

N1044R

【作者名】

クラウディ

【あらすじ】

この日本のどこかに毎口賑やかな家がある。

賑やかな家こと「朝山家」のことにはプログラミング気味な姉妹と主夫つぽい長男がいる。

そしてこれはその朝山家の出来事を書いている小説です。

第一話・朝の恒例行事（前書き）

ところが、新小説です。

更新頻度はかなりばらついて思いますが、ご贔屓にお願いします。

第一話・朝の恒例行事

俺がいつも起きるのは早朝だ。理由は俺が家族の朝飯をすべて作るから。

母さんは仕事の都合で居たり居なつたり、父さんは俺が幼い頃にはすでに離婚していなかつた。

父さんはたまに連絡をとつている

そして俺には姉貴が一人と妹が一人いる。

まあ姉貴は一人ともまともに料理ができないし妹達に包丁で怪我はしてほしくないから必然的に料理係は俺に回つてくるんだがな。おつと、俺の名前を言い忘れていたな。俺は朝山宗佑あさやまむねすけだ。

高校1年をしていて姉貴一人と妹一人のちょうど真ん中が俺の立ち位置だ。

「とどつ、もうこんな時間か。そろそろみんな起こしてメシの時間だな」

そう言つて俺はまず長女の部屋に向かつた。

名前は朝山葵あさやまあおい。この家じゃ一番勉強のできる才女だな。

髪は肩まで伸ばしていて背は高く美人。いわゆる才色兼備つてヤツなのかな？

ちなみに23才で職業は弁護士をしている。

俺は葵ねえの部屋の前に来てノックをして部屋に入る。

「葵ねえ。もう起きてる？」

「ああ。今起きた」

俺が葵ねえを見ると確かに起きたところだつた。

いつもならもう起きてたりするので昨日は仕事が少し長引いたのだ
らしく。

「そりゃ。じゃあ朝飯でてくるから着替えて降りてきてね」

「分かった。宗佑にはいつも迷惑をかけるな

「別に大丈夫だよ。葵ねえは仕事をがんばってるんだから」

「そ、そ、うか? まあ… ありがとな」

「どういたしまして。じゃあ俺は三人を起こしていくる」

そう言つて俺は部屋を出て正面の部屋のドアをノックしてドアを少し開けて頭だけ部屋に入る。

この部屋の主は次女の朝山美咲あさやまみさきがいる。

顔は整つておりツリ目で髪は腰の辺りまで伸ばしてボニー・テールにしている。背も葵ねえより少し低いが十分高い。年は18で高校3年だ。

少し暴力的でハツ当たりはなぜか全部俺に降りかかってきた。
いきなり頬をつねられるわ関節技をかけられるわ…。とにかく俺に
とつては一種の恐怖だ。

「美咲ねえ起きてる?」

「起きてる。もしかして朝ご飯できたのか?」

「できるから早く降りてきてね」

「… なあ、もうちょっとないのか?」

いきなり美咲ねえの声色が変わった。
なんと云つか、とても不機嫌な感じだ。

「別になにもないよ。冷めるから早く降りてきてね」

「…………バカ。宗佑なんてどうかいっつちまえ！」

「痛つ！ いきなり目覚ましを投げるなよ…」

俺は「これ以上怪我をしたくないので早めに部屋を出る。
そして横にある俺の部屋の反対側にある部屋のドアを静かに開けて
中に入る。

この部屋は三女と四女が一緒に過ごしている。
三女が朝山凜で四女が朝山夕菜という名前だ。
凜は中学生にしては大人びた顔立ちで短めのポニーテールが特徴だ。
そして最近クールになつていて少し寂しい。ちなみに14才で中二だ。

夕菜の方はまだ幼い顔立ちで肩を少し超えるぐらいまで髪を伸ばしている。夕菜は俺にまだ懐いてくれている。こつちは13才で中一。俺にとつてはこの子たちが唯一この家で癒しの存在だ。

「あーいー一人とも。朝だから起きろー」

「んむう…。あとからつぶ…」

「夕菜はおはよう。凛は起きないと遅刻するぞ」

「分かったわよ。着替えるから出てって」

「じゃーねー。またリビングで〜」

「おう。なるべく早くな」

そう言つて俺は部屋を出てリビングに向かつた。
リビングには先に「」飯を食べている葵ねえと俺を見て威嚇してくる
美咲ねえがいた。

こうして見ていると姉妹でもかなり違いがあるなあと改めて思う。

「遅かつたな。また凜が駄々でもこねたか？」

「いや、それは大丈夫だよ。それより美咲ねえは食べないの？」

「食べるーでも宗佑を見るとムカつくー！」

「そう。なら「」飯と味噌汁を入れてくる」

俺は美咲ねえの発言を少し無視して四人分の「」飯と味噌汁を用意した。
味噌汁は葵ねえが温めなおしてくれたので早く器によそつことがで
きた。
よそつた辺りで妹二人も降りてきたのでまず一人分の用意を置いて
運んだ。

「はい、「」飯と味噌汁。鰯の開きは暖める？」

「別にいいよ。時間ないし」

「私もいいよ。冷めたときに味がはつきりするしね」

「そつか。なら大丈夫だな。『おい。アタシの』『飯と味噌汁が無いのは嫌がらせか?』美咲ねえは年上なんだからちょっとは待つてよ」
「アタシの方が早く居ただろ!』『なら自分でやれ。ガスの扱いぐら
いはできるだろ?』『う、つるせえ!』

美咲ねえが俺の頬をつねりにきたので俺はお盆でその手をガードし
た。

さすがに数年間に渡つてされたらガードぐらいはできる。

「く、くそー! 弟のクセにナマイキだ!」

「はいはい。なら今から』『飯と味噌汁取つてくるから

『これ以上時間を使うと遅刻すると思つたので、俺はもう一人分の』『
飯と味噌汁を取つてきた。

そしてまだキレイでいる美咲ねえの所に置いて俺も食べ始めた。

「あ、そういうば。みんなの弁当をキッチンに置きっぱなしだ」

「そつか、なら各自で家を出るときに取ればいいぞ。宗佑は食べる
といい」

「あ、うん。ありがと」

「ねえねえそーちゃん。今日のお弁当はなあに?」

俺がもう一度席に座りなおすと夕菜が話しかけてきた。

しかも話題が今日の昼食つて…、これで太らないのが不思議だ。

「それは昼になつてからのお楽しみさ。それより中学の方はそろそろ出たほうがいいんじゃないかな？」

「やつだね。」いつわかも、おこしかつたよ。

「ふえ！？ま、待つてみ凜ちや～ん。」

「あんまり見てて口ケたりするなよ」

「それは夕菜にだけ言つてよ。いつできます」

「じゃ、じゃーねー！ いつできまーす！」

そう言って凜は冷静に学校に向かい、夕菜はバタバタと慌てながら学校に行つた。

のめぐらぬ。」

てか食べてるだけなのに美咲ねえの視線が怖い。

「美咲ねえ、なにを俺に伝えてるのさ。俺にはお前をシバくとしか受け取れてないけど」

「まったくもつてその通りだ。今すぐシバきたい」

「美咲は少し落ち着け。宗佑もあまり美咲を逆立てるな」

「そうだね。ごめん葵ねえ」

「……なんで葵には従順なんだよ……」

「ん？ 美咲ねえなにか言つた？」

「……なんでもない！」

「そう? 一応今日は美咲ねえの好きなメニューにしたんだけど」

「なんで朝飯に繋がるんだよ。……まあ好きだけど」

「そりやよかつた。」
「ああそうまあ、じやあ戸締りは頼むね」

「ああ。任せっきり」

あ、ちよこと街でよ！アタシも行く！」

じゅあ玄関で待ってるから。なるべくね。

そう言い残して俺は弁当を取つて玄関に向かつた。

た。

「弁当はいれたの？」

「大丈夫だ。アタシの方が年上なんだから子ども扱いするな」

一分か二分か、なら行こうか。てか急がないと遅刻だし」

「それは早く言え！ほら！早く行くぞ！」

こうして俺は美咲ねえと学校に向かつた。
ちなみに学校には遅刻せずについた。

第一話・朝の恒例行事（後書き）

どうでじょつか？

私もオリジナルは初めてなのでよく分からぬ……。
ご指摘等あれば感想に書いてください。

第一話・波乱の昼食（前書き）

と書つわけで一話目です。
もしよければ感想の方もよろしくです。

第一話・波乱の昼食

俺と美咲ねえは俺が引っ張られる形でダッシュで登校して遅刻せずに登校できた。

それより片腕引っ張られながら登校したせいできなり肩がダルい。

「はあ…明日からは余裕をもつて家を出よう。そうしよう

「おー宗たん、今日は遅かったね。もしかしてまた姉妹関連?」

今話しかけてきたのはこのクラスの委員長こと七海真央ななみまやだ。

いつもニコニコしていて、髪は短くカットして前髪をピンで留めている。

明るい性格で楽天的に成績優秀・文武両道でオマケに可愛いといいう誰もが羨む完璧超人だ。

今日も元気にアホ毛が揺れているな。なら七海は今日も元気だ。

「宗佑たん言うな。てか、なんで俺が遅れたらそななるんだ。…その通りだが」

「やつぱりね。まあこの私はちゃんと心配してたんだからね!」

そういう終わると七海はなにかを期待した目で俺を見つめていた。金をボツたぐられてもイヤだからとりあえず別の話題を振ろうか。

「んで、お前は俺になんの用だ。ちなみに宿題ならもう出したぞ

「んもー…せつかく超絶美少女の真央ちゃんが話しかけたのにーー」

「自分で言つた。てか騒ぐな。ただでさえ俺はお前のファンクラブに睨まれてんだから…」

「にししー君みたいな鈍感少年は制裁を受ければいいのだよ」

「鈍感とは失敬な。俺のように何もしなくてもウワサが入ってくる奴はそういうぞ？」

「やつぱり鈍感じやん」

「まったく…、何回も失礼な奴だな。」

そしてそのまま俺と七海はそのままチャイムがなるまで話した。そのまま面倒な授業の前半が終わり、昼飯の時間になつた。

「さて、俺もメシ食つか」

「おーい朝山。お前の姉ちゃんが呼んでるぞ」

「美咲ねえが？」の時間だと飯の誘いか

俺はクラス男子Aに呼ばれたままにクラスの扉まで行つた。すると家中では見せないぐらい笑顔の美咲ねえがいた。なんか一周回つて怖い…。

「遅いじゃねえか。で、屋上で食べよ」

「お、おつ。てかなんでそんなに機嫌がいいんだ？」

「やつか？別に普通だろ」

「（こやいや。明らかに上機嫌だ）まあいいや。じゃあ行く「宗たん！一緒に食べよー」宗たん言つた

「いいじゃん宗たん！おろ？そこの人はどうだあれ？」

「やついえば七海は知らなかつたな。俺の姉ちゃんの朝山美咲だよ
「そつなんだ」。初めまして美咲センパイ！」のクラスの委員長の
七海真央です！」

「……ああ。よろしく…」

なんか田に見えて美咲ねえの機嫌が悪くなつてるな…。
……なぜだ？ビーム怒らせるフラグが？

「んで、七海は俺に何の用だつたんだ？」

「やつやつ。一緒に食べよつ」

「それ」「それは無理だ。宗佑はアタシと食べるからな」最後まで
言わせてよ

「むう…別にいいじゃん。ねー宗たん？」

「まあ先客は美咲ねえだからな。今回は諦めてくれ

「むむつー…ところとは新しいライバル登場か！」

「なに言つてんだよ。まあいいや。じゃあ行くつか

「ああ。…帰つたら覚悟しやが」

怖つー? 美咲ねえ怖つー?

しかも家に帰つてからつてリアルすぎる…!
俺がそんな葛藤をしてこるともひつ屋上に着いてしまつた。

「や、やあ。早く食べよつよ」

「それよつやけに親しかつたな。あの…七海だつたか?」

「まあ委員長だしね…。時間ないし食べよ?」

「まあ、いつか。今日の弁当はなんだ?」

「昨日はスーパーが安売りしてたから買つこんだので作つたんだけ
ど…、おこしい?」

「つさ、おいしい。宗祐はますます主夫に近づいていくな」

うつ、地味に人が気にしてこることを…。

まあ人に食べてもらつておいしつて言つて悪こ気はしないから
やつてるんだけどね。

「葵ねえも美咲ねえも忙しいし凜と夕菜には怪我してほしくないか
らね。俺は別に嫌いじゃないし」

「ふうん。それよつも屋上は誰も居ないな」

「本来」」」は立ち入り禁止だよ? もしかして知らなかつたの?」

「し、知つてた！知つてたからなー！」

「分かつたからー分かつたから殴るなー！」

ふう…まつたく。怒つたと思つたら笑つたり納得したり大変な人だな…。

まあそれでも憎めないのは慣れたからか？まあそんなどこだな。そしてそのまま雑談をしながら食べていると予鈴が鳴つた。

「もう時間になっちゃつたか。さて、教室に帰るか

「じゃ、また家に帰つたら覚えとけよ」

「覚えてたか…。具体的にはなにをされるんじょつか？」

「やつだな…、今日は一緒に寝るとか？」

「それはカンベンしてください…」

「ヤダね。ふふふ…今日は覚悟しろよ…」

「はあ…なんでこいつなつたんだ…」

俺はそのまま悩みながら屋上を後にした。

途中で階段を踏み外しそうになつたので考えるのをやめて自分のクラスまで行つた。

そして今日の授業中は美咲ねえの部屋からの脱出法を考え、先生の話がほとんど頭に入つてこなかつた。

第一話・波乱の昼食（後書き）

オリジナルは難しい：
資料がない手探りの状態は何でも難しいですね。
では、次回もよろしくです。

第三話・波乱は夕食にも続く…（前書き）

今回はタイトル通り前回の続きです。
次回は次の日にいけると思います。

第二話・波乱は夕食にも続く…

学校の授業も終わり、俺は夕食の買い物をして帰路についていた。
とりあえず一緒に寝ると言つ提案の打開策は俺が逃げると言つ選択肢は三倍でボコられるのでやめた。

残された選択肢は美咲ねえが忘れるしかなくなつた。

「はあ… 晩飯食つて忘れてくれればいいの…」

「あ、そーちゃん! 今帰つてるの?」

「夕菜か。じゃあ凛もいるんだな」

「悪かつたわね、私も一緒にいて」

「うふ。凛ちゃんを待つてたんだ~」

「うふ。凛ちゃんを待つてたんだ~」

「そういや凛は生徒会委員だつたな。

なるほど、生徒会の会議を待つてたなら遅れるな。

「そつか。相変わらず凛は真面目やんだな~

「ちよつと… 一きなり頭撫でないでよ…」

「あーいいなー。私も私も~」

「ほれほれ~。つて、そろそろ帰つてメシ作らねえと

「えー。 むつともつとー」

「また後でやつてやるから。 そろそろ家に帰るぞ」

「私は元々そのつもりよ」

「れつついーー！」

「うして俺たち三人は家に向かい歩みを進めた。
途中で夕菜が今日の晩飯を尋問のように聞いてきたのはある意味怖
かった。

そんなこんなで俺たちは自宅に着いた。

「ふう…。 さてと、 今日は時間もあるしカレーを作るか

「えつ…？ 私が聞いたときはお魚つて言つてたじょん…！」

「あれは嘘だ。 正直あのときはお魚つて言つてなかつた

「ヒドイよー！ 私の純情を弄ぶなんて…」

「夕菜。 人聞きが悪いからやめてくれ…」

「でも兄さんならやりかねませんよ。 少なくとも私はそつ悪いです

「凛もひでえなあ…。 まいいや、 そろそろ作り始めるが

そう言つて俺はキッチンに入つて料理を始めた。

作つてみるとこに葵ねえも帰つてきたので今日も晩飯は母さん以外揃

つた。

そしてカレーも煮込み終わって、みんなで食べているときに波乱は再び俺を襲つた。

「なあ宗佑、お前約束を忘れてないよな」

「（覚えてたか…。とりあえず惚けるか）約束？俺なんか約束したつけ？」

「宗佑は忘れてもアタシは覚えてるからな。惚けても無駄だ」

「はあ…やっぱ無理だつたか…。けやんと覚えてるよ」

「約束？宗佑は美咲になにかしたのか？」

「うん。なんでそなつたか分からぬけど今日の夜は美咲ねえと一緒に寝ることになつたんだよ」

俺が約束の内容を言つた瞬間。周りの温度が3度下がつたと思つ。そして葵ねえはスプーンをかなりの力で握り締め、凛は無言の圧力を俺にかけてきて、夕菜はガツガツとやけ食いを始めた。美咲ねえだけはなぜか勝者の風格を漂わせている。

「宗佑。お前も年頃だし美咲と一緒に寝るのはどうかと思つた」

「ウ、ウン。ソウデスネ…」

はつきり言おう。怖い。

笑顔は引きつってるしスプーンはもう曲がっている。

その状態で冷静に注意されると怖い。

「モーちゃん！ おかわり！ 大盛りで！」

「お、おひ。 そんな勢いで皿を出さなくとも…」

「早く…モーちゃんは私の純情を弄んだんだから…それでチャラに
してあげる…」

ヤバイ…。葵ねえの血管が切れそうだ…。

と言つよりなんで夕菜まで火に油じゃなくてガソリンをぶちまけた
んだ！

ほら見る。葵ねえに掴まれている俺の右手首が悲鳴をあげそうじや
ないか！

「宗佑？ お前はいつの間にそんな奴になつたんだ？」

「葵ねえ… 痛いです…。 手首を離してくださいませんか？」

「駄目だ。 宗佑はちゃんと話しておかないとけないからな

「いや… それと手首は関係ないんじや…」

「ん？ 宗佑はこいつだよな？ お姉ちゃんに反論しないよな？」

「…………はい」

駄目だ。 怖すぎる。

これ以上被害が拡大しないためには俺の手首には犠牲になつても
おひ。

「じゃあ今から私の部屋に来い。ちやんと話をしよう」

「…………はい。分かりました」

そして俺は手首をガシッと捕まれたまま葵ねえの部屋に連行された。

「お、じゃあな。今日の夜のこと忘れんなよ」

美咲ねえ。これ以上油を注がないでくれ。

「わようなう。兄さん」

せめて夕菜の発言に対しても説明して欲しかったなあ。マジで。

「あーー！せめてご飯だけでも入れてけーー！」

「メン。さすがに俺は今ピンチだから自分でやつてくれ。
そして三人の言葉を最後に俺は葵ねえの部屋と書いつつの尋問部屋に連行された。

「イスは一人分無いからベッドに座つてくれ」

「う、うん。それで何をされるのでしょうか？」

「なあに簡単だ。真実を話してくれればいい」

駄目だ…。リビングでのやり取りは全て真実だ…。

さて、俺は生き残るためになにをすればいいんだらつか…。

「まずは美咲の部屋で一緒に寝ると書つことだが本当か？」

「は、はー。本当であつます」

「ん？よく聞こえなかつたな。もつ一回叫びてくれ」「いや、だから本当で「すまない」もつ一回叫びてくれ」…本当です？」

「宗佑。嘘はいけなこだ。わあ、本当のことを叫びてくれ」

そういつと葵ねえは俺の肩をガシッと掴んだ。
ヤバイ。肩は手首よりヤバイぞ。
ここは嘘でもいいから合わせなこと…。

「つ、嘘…ですか」

「やつぱつな。宗佑は昔から私にベツタリだから。私以外とはありえん」

「（ベツタリ？そんなつもりはないんだが…）そ、それだね」

「じゃあ夕菜の件は本当か？」

休む暇もないことはこのことだな…。

さて、まだ肩が犠牲になつていいからへタなことさせ言えないな。

「あれは夕菜の過剰な表現と叫ぶつか…」

「過剰？ならそれ以下のことをしたんだな？」

ヤバイ……俺の肩が外れて軟体生物になつてしまつ……！

「してないしてない……」

「そうか。本当のことを話してくれてありがと」

「どういたしまして？じゃありビングに戻らうよ」

「そうだな。…………これで美咲の策略は阻止できた」

「ん？どうかしたの？」

「なんでもない。それでは行こうか」

こうして俺への尋問は終わった。

そして俺は何事も無かつたように装つてリビングに戻った。

「遅かつたな。カレー冷めてるぞ」

「うん。別に食べれるから大丈夫だよ」

「そうか。……なんなら食べさせてやるつか？」

ふう……神様は俺を殺したいのか？

またリビングを離れる前の状態に戻つたじゃないか。
ただ違うのは凛が自室に戻つたということだけだ。

「い、いいよ。一人で食べれるから」

「そうか……ならアタシは部屋に戻るな」

「うん。じゃあね」

「風呂入つたら来いよー待ってるからなー！」

そう言つて美咲ねえは自室に戻つていった。

そして俺も食べ終わつたので流し台に皿を置いて自室に戻つた。
もう洗い物は明日でいいや…。

「ふう…やべえ。メシ食つただけなのに疲れた」

俺は部屋に戻つたらドッと疲れが出たのでベッドで横になつた。
すると疲れと満腹感で気付いたら寝てしまつた。

第三話・波乱は夕食にも続く…（後書き）

なんだか葵がヤンキーっぽくなつたなあ…。

次回は登場していない朝倉家のお母さんを出したいなあ。

第四話・朝山家の母（前書き）

と並んで、この話題は母親の登場です。
最近は、この方が発想が浮かぶのはなぜ…？

俺は昨日の晩飯の後はすぐに寝てしまつたよつだ…。都合がよく今日は休日なので学校に遅刻するようなことはなかつた。休日はみんながみんな自由に行動するので朝ご飯は作らない。作るのは毎と夜だけで済むのは俺にとっては楽だ。

「あ、昨日の分の洗い物と洗濯をしないとな…」

俺は思い出したので体を起こした。
すると左腕だけに重さを感じたので見てみると…。

「すう…すう…うう…、まだ食べれるよ~」

「なにやつてんだ夕菜…。起きろ、起きろっ」

「うみゅ~あ、おはよーモーちゃん」

「おはよ~。そして夕菜はなにやつてるんだ?」

「モーちゃんと一緒に寝たかったの。美咲お姉ちゃんぱつかりズル
いー」

あ…昨日の約束守れなかつたなあ…。
今日美咲ねえに何されるんだろ…。

「とりあえず離れてくれ。着替えてから残つてる家事をしたい」

「む~…。じやあ私も部屋に戻るよ…」

「そりゃだ。朝ご飯は昨日のカレーで我慢してくれ」

「分かつた。じゃーにー」

そつと夕菜は俺の部屋を出て行った。

俺もベッドからもそのままと出てから着替えを持つて風呂場に向かった。

「はあ……たすがに汗かいたまま寝たら気持ち悪いな……」

「ふう……すつきりした……」

「ああ、なんてことだ。」

まさか浴室の廊下で美咲ねえと出くわすなんて……
ヤバいなあ……俺の人生もここまでかあ……

「や、やあ。おはよう美咲ねえ」

「…………なんで」

「え? もう一回言つた? 「なんで昨日は部屋に来なかつた?」 そ、それは……」

「まあ大体検討はつくなが、宗佑の口からちやんと聞きたくてな

「じ、実は疲れと満腹感でベッドに横になつたら寝てたんだ

俺が理由を言つと美咲ねえはいきなり抱きついてきた。
ヤバい……このままジャーマンスープレックスに繋がれたら避けれない

い…

「よかつた…！別に嫌いじゃないんだな…？」

「う、うん。嫌いじゃないよ」

「よかつた！よかつた～！」

「ちよ、ちよー苦しいです…。」

「一体どこからそんなパワーが出てるんだ…！
それに美咲ねえの胸が当たつてる…！
意識するな俺！心頭滅却して煩惱をぶつ潰せ…」

「まつ…昨日注意したばかりなのにな…」

「あ、葵ねえ…？」れば…その…」

「葵には関係ねえだろー」アタシと宗佑は約束の確認をしてただけだ
「…」

絶望的すぎる…。

この状態を打破する策は存在しないだろう。
もう俺は処刑を待つしかないのか…。

「ひねりでですよ。廊下で騒がないでください」

「り、凛？降りてきたのか？」

「当たり前です。廊下で騒いでいたらそりゃあ起きますよ」

「ついでに私もいるよ～！」

「夕菜もかー？ てかお前はノリが軽いなー！」

なんだか混沌としてきたぞー！？

そしてこのまま話し合いになつてこると葵ねえの提案で全員リビングで話し合うことになつた。

俺たち五人がリビングについて混沌とした話し合いを続けていると玄関の扉が開いた。

そして玄関を開いた人物がゆっくりとリビングの扉を開いた。

「ただいま～。お母さんが帰ってきたわよお～」

「　「　「　「おかえりっ……」」」

なんかすげえ可哀想だな…。

ほれ見る。もう涙腺が崩壊しかけてるじやないか。

「そーすけえ…なんか娘達が怖いよお…」

「ははは…。よしよし」

俺たち朝山家の母である朝山遙はインテリアデザイナーで家にはあまり帰つてこない。
あさやまはるか

容姿は一言で言つと若い。実年齢は四十はいつてるのに若く見える。髪は腰まで伸びた髪をそのままにしていて、言動はなんだか幼い印象がある。

ちなみに怒るとメッチャ怖い。それと背が低い。

「むふう……そーすけの手は安心するよお……」

「ははは……なんだか子供とひとまどい変わりなーいなあ……」

「あ、ひどおー。わすがに「子供じやないよお」

「はーはー。いーすいす

ヤバい。なんだか癒されるわあ……。

最近は癒し成分が少なかつた分余計に癒されるわあ……。
でも他の四人の目線がすげえ怖いわあ……。

「はふう……仕事疲れが一気に消し飛ぶう……」

「お母さん。今は大事な話をしているので宗佑から離れてへださい

「えー、葵ちやんのけちんぽ

「その意見には賛成だ。宗佑から離れろ」

「そ�うです。お母さんでもさすがに空氣を読んでくださーい

「モーだよーモーちゃんは監のものだーーー！」

「「「」お母さん……グスッ、空氣読めるもん…」

はあ……なんだか余計にややこしくなったな。

四人が怒つて母さんは泣いて俺のシャツが涙と鼻水でぐしゃぐしゃになるし……。

なんだか散々な休日だ……。

第四話・朝山家の母（後書き）

今回は短めです。

遂に朝山家のお母さんの遙さんがました。それとなんだかハーレム度合いがすごいことになつたので、タイトルの方を変更しました。

第五話・一時休戦？（前書き）

最近は疲れで眠くなる…。
更新は不定期になるかも…。

第五話・一時休戦？

休日の大半を使つた話し合ひは午後六時を持つて一時休戦？となつた。

とりあえず今のところは話が進まないままやや険悪な状態が続いている。

「…………」

「と、とつあえず何か食べる？」のまま険悪なままじや嫌だしそう……

「…………宗佑……」

「カリバリズム！？俺は食われたくないよ……」

「…………チツ…………」

もしかして俺つて嫌われるんだろうか……？

まさか何か食べるつて聞いたら俺つて答えがくるとは……。

「じゃ、じゃあ何かあつたら呼んでくれよ。俺は部屋に帰つてるから

「あひ

「えへ、そーすけが居ないとやだへ」

すこません母さん。俺にはこの空氣は耐えられないんです。

「やだつて言つたつて俺が居たところでなにも変わらないだらうじ
る」

「じゃあお母さんやーすけの部屋に行へー

「分かった…つてー違つー」「やつたあー」「ひよーとー聞こへるー。」

「これじやあ何言つても聞いてくれないにな…。
しょつがない。母さんも部屋に連れて行くか…。」

「じゃあ俺とつこで母さんは部屋にこなー」「ちよつと待て宗祐」
…なんどうか葵ねえ

「なに自然な感じでお母さんを部屋に連れ込もうとしてるんだ」

「別に連れ込んでるわけじゃない気が…」

「いや、連れ込んでるな。葵の意見にアタシは賛成だ」

「姉さんたちの意見に私も賛成よ」

「私もー」

ん?なんかデジヤブつてないか?

この会話はどうかで聞いた気がする。

「ふーふー。別に葵のやつたちはこつも宗祐といふるからいいじゃな

いのー」

「だからと許つて許せませた。どうせお母さんは宗祐と添い寝とか
考えてるんでしょつー。」

「あーひー…せひぱつ葵ひやん」ほバレちやつたか…

「なんだと…？それは許せん…めずその特権はアタシにある…。」

「美咲姉との約束は昨日でしょひーなひ今日は約束の翌日よ」

「なんだと…姉にそんな屁理屈を並べひとはナマイキだぞー。」

「ナマイキでも構わないわ」

「いのヤローー！妹のクセにー！」

なんか再び混沌としてきた…。

唯一夕菜だけが机の上で居眠りしている。全く、自由な奴だな…。

「とつあえず全員落ち着け。まずは何で言ひ合ひてるんだ？」

「美咲が宗佑に抱きついていたから注意したんだろ？。昨日も注意したのに懲りてないようだしな」

「（注意？あれは脅迫に見えたんだが…）まあそれにつけば俺が謝るつて言つので許してくれない？」

「む、むう…宗佑に言われたんじゃ仕方ない。今日のといひは許してやる」

「あつがと葵ねえ。じゃあこの問題は解決つて」といい？

「アタシと一緒に寝るつて言つのが解決してないぞ」

「これは一番難しい問題だな…。

「こればっかりは選択をミスすると振り出しへ戻るからなあ…。

「うみゅ…なに話してるの~?」

「夕菜か。まあちょっと美咲ねえの問題を解決してるとこだ

「一緒に寝るってやつ?..」

「やうやう。どうすれば解決できると思つ?..」

俺がそう聞くと夕菜は腕を組んで考えるそぶりをした後、なにか思いついたのかいきなり目を見開いた。

「モーだよーモーちやんが交代でみんなと一緒に寝ればいいんだよー!..」

「「「「モーか! その手があつたー!」」」

「いや待てーそれは俺に色々ヤバい!..」

「じゃあみんなもそれで賛成?」

「「「「賛成だ(だよ)」」」

「俺の意見は無視か!..?無視なのか!..?」

そして俺の意見は聞くどりいか無視されっここの問題は解決した。
ちょっと待てよ。俺の理性とか理性とか理性とか理性がヤバい…。

「じゃあ墨口からで順番は年上から年下の順でいいね？」

「お母さんねー一番だー。やたー」

「まあいいだねー。ビーフ全員に回つてくんだからな」

「わつだな。だが、宗佑が誰を気に入るかは恨みつこなしだぞ」

「美咲姉さん、わつまなこでくだせよ」

「それは凛ちゃんにも言えるよー。凛ちゃん結構恨みつ子だもん」

「わ…これからは落ち着かない夜が続くのか…」

「つって俺たちは数時間かけて悩んでいた問題を解決した。

まあ俺だけは新たな問題を抱えているんだがな…。

俺たちは久しぶりに家族で晩飯を食つた後に各自が明日に備えて眠りに付いた。

第五話・一時休戦？（後書き）

と言つわけで次回から宗佑の眠れぬ夜がスタートします。では、次回もよろしくお願いします。

第六話・宗佑の眠れぬ夜～朝山遙の場合～（前書き）

と言つわけで今回からは眠れぬ夜がスタートです。
とりあえず今後の展開は自分でも分かりません。

第六話・宗佑の罪れぬ夜／朝山遙の場合

一田のほとんどを使った大会議は夕菜の意見で一瞬で解決した。そして俺の意見を無視した案は可決され、遂にその案が適用される日がきました。

つまりはあの会議の翌日だ。そして今俺は学校で二時間の勉強をしている。

「はあ……最近はため息が増えたな……」

「朝山。俺の授業でため息たあ……、覚悟はできるんだよな?」

「できてません」

今授業をしている先生は元・暴走族とウツサの遠藤先生だ。このゆとりの時代に鉄拳制裁をするほどの度胸がある先生だ。だが親からの信頼は厚く、訴えられないのはすまること無い。

「やうか。できてないか。だが関係ない」

「いだあー? ……理不尽だ」

「理不尽など関係あるか。じゃあ続きを始めるぞー」

「うじて何事も無かつたように授業は再開された。あーいってえなあ……。コブができてないのにいてえ……。

そして強烈な一撃を受けた俺は正面に授業を受けることとした。

長い授業も終わり、俺は今帰路についている。

今日の晩飯の材料は買い込んでるので問題ない。

それより問題は今日の夜だ。母さんは晩飯を食い終わると同時に俺を拉致するだろ。しかも抵抗できないうらうの力で引っ張るから逃げることができないと予想する。

「まあいいか。どうせ俺が早く寝ればいいんだし」

俺はプラス思考に考えて家に帰った。

家に帰ると玄関で母さんが出迎えてくれた。

「おかえり～。待つてたよお～」

「ただいま母さん。今から晩飯作るからもう少しあと待つてね

「はあ～。今日の夜は楽しみだねえ～」

「俺は微妙だよ」

「ぶう～、ひどこよ～…

俺はスネている母さんを玄関に置いてキッチンに向かった。せめてもの反撃のつもりか、母さんは料理をしてる間ずっと俺に貼り付いていた。

おかげで腕と足の力を使って筋肉痛になりそうだ。

「はあ……はあ……、ねえ母さん。そろそろ離れてくれない？」

「いやー」

「……そうすか。はあ……疲れる……」

疲れるがにこいで母さんを無理やり剥がすと今度はおんぶになりかない……。

俺は体に張り付いてる母さんを気にしないようにして料理を続けた。てか息子に張り付く母親って大丈夫か？ 常識的に。

「よしできた。母さんはみんなを呼んできて」

「分かつた～。みんなおいで～」飯だよ～

母さんがみんなを呼ぶとみんながリビングに集まった。

それよりのほほ～んとしたあの声でみんなが集まるのは凄いな……。そして久しぶりに家族でご飯を食べていると俺の携帯が鳴った。

俺はリビングから廊下に出て電話に出た。

「ん？ 誰だろ。もしもし？」

《よつ、元気してるか？》

「なんだ、父さんか。一体どうしたの？」

電話の主は朝山家の元・大黒柱である朝山大吾あさやまだいこだった。

俺が物心ついたぐらいの時に離婚して、母さんに電話をかけると着信拒否設定をされた可哀想な男だ。

母さんの言いつけで俺たちも着信拒否にしているが、俺だけ父さん

に家の電話で近所に呼び出されても下座で着信拒否しないでくれと頼まれたので携帯に連絡がくる。

『なんだとはづれないな。どうだ、みんな元気にしてるか?』

「普通に元気でやつてるよ。それで本題はなに?」

『やっぱ氣付いていたか。実はお前に頼みたいことがあってな』

「頼みたいこと?」

『実は今猛烈に寂しくてな…。母さんの風呂に入つてる時の写メを送つてくれ』

「一回死んでください」

そう言つて俺は電話を一方的に切つた。
すると一秒も満たないスピードで携帯に連絡が入つた。

「もしもし。着信拒否したいと思つます」

『すまなかつた!だから着信拒否はやめてくれ!』

「はあ…、じゃあ本当の用件はなんなんですか?」

『あれも本題なんだがな。まあ妥協して娘達の風呂の「ひみつない」めんなさい!切らないでください!』

「次変なことを言つたら本気で着信拒否にするからな

『はい。分かってます。じゃあ母さんの寝顔なさいこですか?』

『まあ…それならいいか。じゃあいつか送るよ』

『恩に着るー。じゃあ写メがくるまで待ってるからなー。全裸でー。』

『服を着ろ変態が。じゃあね』

こうしてバカ親父との電話は終わった。
まったく…、顔はいいんだからもっと眞面目になればいいのに。

俺は廊下からリビングに戻つて自分の席に座つた。

『誰から電話だつたんだ?なんだか怒つていたように見えたが』

「あ、うん。父ちゃんなくて、クラスの友達からだつたよ」

「ん? どうか。なら冷める前に食べなさい」

「うそ。気を使つてくれてありがと」

「かまわないさ。この家の家事は姉妹がやつてくれるんだ。姉としてまじめのぐらこまな

『うそ。ありがと』

そう言つて俺は飯を食べ始めた。

はあ…今思えば母さんの寝顔なんていつもつらいんだ。

『…』

「美咲ねえもう食べたの？」

「ああ。じゃあな」

なんだか最近美咲ねえは不機嫌だなあ……。

食べ終わってからもイライラしながら部屋に戻つてたし……。
それからはみんなが食べ終わって俺が洗い物をしていくとまた母さんが張り付いてきた。

リビングでテレビを見ていた凜と夕菜から殺氣に似たものを感じたのは気のせいだろう。うん。

「よし。これで洗い物は終わりだな」

「やつた。じゃあお風呂行こー。」

「まだ早いよ。それにまだ沸かしてないし」

「じゃあ沸かしてよ」

「はーはー。じゃあ離れてくれなー?」

「やー」

「やーつて言つたつてなあ……」

結局このまま風呂を沸かしてリビングのソファーでくつろいだ。

そのときはさすがにどうしてくれたので助かった。

まあ右に夕菜、左に母さんがピッタリと付いていたので怖かった……。
そして風呂が沸いてみんなが入った後に俺は入った。

「ふう……もしかしたら風呂が一番落ち着くかも……」

俺はまさか浴室でブレイクタイムを過ごす日が来るとは……。まあ口ヒーはないけどね。

少し休息を楽しんだ後に俺は体と頭を洗つて浴室を出た。そして寝る服であるTシャツとジヤージを着て廊下に出てのこきなり水月を強打されてどこかに拉致られた。

「うぐう……こいつえなあ……」

「待つてたよー。や、早く寝よーーー！」

「母さん? もしかして俺を殴つたのも?」

「うふーーあの人と喧嘩になつたとき用に覚えてたんだよーーー」

「父さん……哀れだな……」

おそらくあの人正体は父さんだらう。

喧嘩になるたびに水月をボコボコに殴られたのにまだ好きって……。

「そ、そなただ……あーーー」

「わや、早く寝転んでーーー！」

「ちよ、待つてーーのわーーー！」

俺はいきなり腕を掴まれて合気道の「とくべっ」ドに投げられた。

なんでこんな技を覚えてるんだよ……。あ、そりゃ。あのバカ親父のせいか……。

そして俺は抵抗もできなまま母さんの抱き枕状態になつた。

「むふう…そーすけあつたかあい」

「そりや風呂に入ったとこだからな。俺は逆に暑い」

「お母さんそーすけと再婚しようかな~」

「無理だよ。それなら父さんと再婚しなよ」

「え? 今なんて言ったの? そーすけ?」

ヤバーー。やつちやつたー。

もしかしたら押しちゃいけないスイッチを全力で押したかもなー。てか抱きしめられてる左腕がきしんでるー。

「……なんでもないです」

「だよねー。そーすけからあの人の名前が出てくるはずがないもんねー」

「ですよねー。じゃあそろ寝てもいいかな?」

「うん、いいよー。……むふふ、寝たら私の天下だよ…」

さつき聞こえた不穏な言葉は聞こえなかつたことにしてよつ。それに俺が寝たふりしてれば仕事疲れで母さんが寝るだろつし。そして數十分がたつたとき、俺は目が冴えているが母さんは熟睡していた。

「く~く~く~。ひゅふふ…」

「さて、これだけ寝れば写メ撮つて大丈夫だな」

俺は携帯のライトをオンにして手早く写メを撮つて父さんに送った。
そして今度は数秒で父さんから感謝の言葉が数十行に渡つて書かれたメールが届いた。

俺はそれを流し気味に見て携帯を閉じ、寝る体制に入つた。
俺も疲れていたのか目と閉じるとゆつくりと眠りに付いた。

おまけ

「にゅふふ～。隠れてお母さんの寝顔を撮るなんて可愛いなあ～」

私はそう言つてそーすけの腕にギュ～っと抱きついた。
そしてどんな顔をしていたのかを見るためにそーすけの携帯を開いてみた。

「う～んと。データフォルダに…ないよー?」

私はそーすけのデータフォルダとSDカードの画像データをすべて見た。

でも私の寝顔を写している画像は一件も無かつた。

「むむつーもしや今日の夜、飯のとき話したクラスの子に送ったのかな！」

私は宗佑のメールフォルダを開いて見てみた。

すると一番上には一番むかむかする名前が表示されていた。

「朝山大吾」

向こうの浮気が原因のクセに会いたいと言つてきたバカだ。
もう私にはそーすけがいるからいいもん！

「でもそーすけは秘密で連絡を取り合つてたんだ…。しかも着信件
数もバカの方が多い…！」

私は思わずそーすけの携帯電話を握り締めてしまった。
携帯からピキッて音がしたのはしようがないんだよ。

「まあ会つてないならいいや。でもそーすけには報いを受けてもら
わないとね」

そつ言つて私はそーすけの携帯でバカを着信拒否に設定した。
さて、明日も休みだけど早く寝よつと。

第六話・宗佑の眠れぬ夜～朝山遙の場合～（後書き）

なんだこりゃ。

正直自分でなにを書いているのがが分からなくなってきた。ということで次回も宗佑の眠れぬ夜編です。

第七話・宗佑の眠れぬ夜～朝山葵の場合～（前書き）

活動報告にも書きましたが、一万アクセス超えてビビリました。
いつも見てくださっている方には本当に感謝です。

第七話・宗佑の眠れぬ夜／朝山葵の場合

俺はいつも通りに携帯のアラームに起じられて目覚めた。

そして起き上がるすると腹の上に何かが乗っているので途中でベッドに倒れてしまった。

乗っているものの正体を確かめるために首を下に向けると母さんが俺の腹の上で寝ていた。

「はあ……昨日は妙に寝苦しいとthought…。あら、ヨダレがたれてるし…」

とりあえず着替えて弁当を作るか。朝食はトーストでいいや。

俺は母さんをどこでベッドに再度寝かした後に自分の部屋に戻った。そして制服に着替えると階段を下りてリビングにあるキッチンで弁当を作り始めた。

すると誰かが階段を下りてきたようで、リビングの扉が開かれた。

「おはよう兄さん」

「ん？ 凜がこの時間に起きるなんて珍しいな。おはよう

「余計なお世話です。ね、ねえ兄さん、姉さん達はまだ起きてないの？」

俺は凛を見ると珍しくそわそわしていた。

俺たち以外は起きてないことを知りせると凛は安堵のため息を吐いた。
な、なんだ？なんか凛がしおらしいな…。

「ねえ兄さん。ちゅうといひかで来て」

「あ、おひ。びひしたんだ?」

俺が凛に呼ばれてそばに行つてみると、いきなり凛が抱きついてきた。

「な、な、なにしてんだ!…?」

「なにつて抱きついてるんです。……姉さんばかりズルいんだもん」

「ちゅよ、ちゅよと待て! 気持ちが落ち着かん!」

すると追い討ちをかける! と、凛は頭を俺の胸にグリグリと押し付けてきた。

ヤバいっすよ。心なしか抱きしめる力も強くなつてるし…。

「ふう…あつたかい」

「ど、とつあえずなんでこんなことを?..」

「だ、だつて……みんなが起きると恥ずかしい」

恥ずかしい? まあ凛はあまりスキンシップはしてこないしな。まあ別に家族だし遠慮することはないと思つんだけどな…。

「まあいいや。俺は別に大丈夫だからいつでもいいんだがな

「…ひん。ありがと兄さん」

そう言つと凜はしばらくそのまま抱きついていた。

そして数分たつた後に凜は顔を真っ赤にして一階に走つていってしまつた。

うんうん。なんか新鮮だ。

「あ、そうだ。弁当作らないとな」

こうして俺は再び弁当作りに戻つた。

そこからはいつも通りみんなを起こして朝食を食べて学校に向かつた。

朝食のときの葵ねえの視線が妙に怖かったのは氣のせいなんだろうか…？

学校の授業も半分終わり今は昼食の時間になつた。
今日は美咲ねえは来なかつたので委員長こと七海と一緒に食べている。

まあ半分強制的つて感じだけだ。

「宗たん寝不足？目の下にいつもくら黒できてるよ

「そつか？別に俺は眠くないんだが」

「ふうん。ねえもう一個聞きたいんだけどいい？」

「珍しいな。いつもならプライバシーなんて氣にせず聞いてくるのに

「うるせこやい。でね、聞きたい」となんだけど。なんで宗たんから女子の子の匂いがするの?」

俺は持っていた箸を落としてしまった。
幸い机の上だからいいんだが、まさか凛が抱きついたときにはいつつたのか?
だがものの数分だ。いくらなんでもそれはないだろ?」

「なに言つてんだ? そんなに匂つか?」

「ううん、別にそんなに匂わないよ。でも私は嗅覚には自信があるのだよ」

「お前は警察犬か。つまらなこと言つてないで食え」

「ふう…私にとつてはつまらないこと言つてないで食え」

「はいはい。早く食わないと昼休みが終わるぞ」

「モーー無愛想な宗たんにはこうしてくれるー。」

そう言つて七海は俺にヘッドロックをかけてきた。
ヤバい…コイツ本気で落とす気だ…。

俺は降参の印として七海をトントンと叩いた。
すると七海はいきなり技を解いて数センチ後ろに下がつてしまつた。

「はあ…はあ…、どうした七海?」

「そ、宗たんてばダイタンだね…。こきなり私のむ、む、胸を触る

なんて……

「え？俺もしかして腕じゃなくて胸を触ったのか？」

「う、うん」

「す、すまん！俺は腕を叩いたつもりだったんだが……」

「う、うきははどうすればいいんだ！？」

「女の下に恥をかかせたままじゃ男としてダメだろ……。よし、俺は代償としてパシリでもなんでもいいからじょ。そういうと俺が責任で押しつぶされそうだ。……」

「七海。すまなかつた！侘びに俺はなんでもじょ。パシリでも下座でもなんでもいい」

「……え？私の言つ事なら何でも聞くの？」

「ああ、でもできるだけ現実的な事で頼む」

「じゃ、じゃあ今週の田曜日と一緒に出かけよ。詳しくはメールで送るから」

「ああ、でもそれでいいのか？それじゃ罰則にならない気が……」

「いいのー。宗たんは私の言つ事を聞いてー。」

「う、よ、了解です！」

そう言つと七海は廊下へ全速疾走していった。

…もう授業が始まるんだがな。

結局七海は六時間目の中盤まで帰つていなかつた。

それに授業中も俺をチラッと見た後に顔をそらすと言つことを繰り返していく、俺は全然落ち着くことができずに授業を受けた。

なにもないまま学校が終わつて俺は帰つていた。

結局七海は最後まで落ち着かないで、学校が終わるとともにダッシュで帰宅していた。

俺も帰宅部でなにもする「」ことがないので家に直行している。そしてなにもなく家についた俺は玄関の鍵を開けて家の中に入った。

「そーすけえ…おなかすいたあ…」

玄関には空腹で倒れている母さんが居た。

「はあ…?なにせつてるんだよ母さん…昼食なら自分で作れるだろー!」

「だつてえ…そーすけのが食べたいんだもん…」

「はあ…なにせつてんだよ。じゃあ手早く晩飯作るから待つて」

俺は急いでキッチンに向かつて料理を始めた。

手早く作れるつてことで今日は野菜炒めと卵のスープだ。勿論スープは粉末スープだ。

「母さん出来たよ。お茶碗持つてきて、ご飯よそいから」

「はあーい。あ、ちゃんと多めに盛つてね」

「はいはい。ちやんとよく齧んで食べなが

母さんはイスに座ると野菜炒めとスープをガツガツ食べだした。

俺が調理器具を洗つてゐると玄関が開いた音がした。

ソコで腰痛で仰向けておでこに枕を置いた。

「ただいま。… 母さんはもうと落ち着いてください」

ふあふえおいふいんふあふおん(訛:た)ておいしいんだもん)

「いや、私は後でいい。仕事の残りを家に持つてきたんだ」

「ああ。ありがとうございます」宗佑

そう言って葵ねえは階段を登つて自分の部屋へ戻つていった。
さて、時間もあるしインスタントじゃなくてドリップで淹れるか。

「そーすけ！ おかわり！」

「はいはい。…つて、それぐらい自分で「いやー！」…もつといや」

俺は母さんのおかわりをよそい、ドリップコーヒーの調子を見ていると美咲ねえに凜、夕菜も帰ってきた。

そしてみんなの「ご飯をよそつたりしていると」「コーヒーが完成したので、階段を登つて葵ねえの部屋に向かった。

そして途中で口ケることもなく部屋の扉の前にたどり着いた。

「葵ねえ？」「——コーヒーできたから入つていい？」

「ああ。入つていいくぞ」

俺は扉を開けて部屋に入った。

俺にとっては少し恐怖の記憶がある部屋だが綺麗に片付いている。

「はい。まだ熱いから気をつけてね」

「ありがとう宗佑。……ん？インスタントじゃないのか？」

「ちよっと時間があつたからドリップで淹れてみたんだけど……もしかしておこしくなかつた？」

「いや、おこしきや。宗佑は昔から気が利くな

「まあ俺はこれぐらいしか出来ないし。じゃあ俺は戻るね」

「待て、今日の約束は覚えているか？」

「あー、すっかり忘れてたなあ……。

とりあえず選択肢もないし普通に答えるか。

「覚えてたよ。…………まあ少し怖いけど」

「怖い？宗佑は私に恐怖心を抱いているのか？」

地獄耳なの忘れてた…。

しかもいつの間にか俺の肩をがっしり掴んでる…。

「どうなんだ宗佑？ん？」

「怖くないよ…。でも、ちよっと肩が痛いかな？」

「もううう。抱くわけないよ」

「じゃあ私と一緒に寝るよな？」

「うう。一応これは決定事項っぽいしね

「じゃあ寝るぞ。着替えは私のシャツを使つてーーー

ん？なんか話がそれてないか？

しかも俺はパンツで上がシャツておかしくない？

「いやー、せめて下にジャージを…」

「ダメだ。じゃあ私も寝るから我慢じろ

「いやー、我慢以前に服をくださー

「ダメだと叫んでるだろ？ 拒否するなら実力行使だ」

「ううと葵ねえは肩を掴んでいる手でそのままベッドに俺を倒した。

しかも逃げようとしたときマウントポジションを取られて逃げれなくなつた。

「あ、葵ねえ？ マウントポジションは緊張するんですが…」

「関係ない。わあ目を開じれば時期に跟ぐなる

俺は恐怖のあまり目を開じた。

なんだか最近は美咲ねえより葵ねえの方が怖い…。

すると俺は本能のレベルで察知したのかすぐに跟ってしまった。

おまけ

「ふふっ、やつと寝たか。まつたくいつまでも可愛いい奴だな

」 そつ言つて私は宗佑の頬を撫でた。

男にしては綺麗な肌で、撫でているとこっちが癒される。

「いつから私はこんなに惹かれたんだろうな…。今思えば昔から気が遣いがうれしかったな

私がイライラしていると聞いてくれたり、疲れていると甘いものを持ってきてくれたり…。

本当に私にはもつたいない弟だ…。

「えひり……あめりあ、ニセマジで……俺は七海まだ食えど……」

「七海？聞こえたことのない名前だな……」

「こやこや……、お前は女だからいいが……いやあ甘こものはつかりい

「…

「せせせ……宗祐は夢の中では他の女と遊んでるんだな……」

私が今無性に腹が立つてるのは好きだからだらう。
だが家の中でも余ると喧嘩メロットがある以上私は七海とせせせ
は負けないだらう。
私はやうに寝ついてて、宗祐を抱き枕元にして就寝した。

第七話・宗佑の眠れぬ夜～朝山葵の場合～（後書き）

この話を書いてる途中にPCがフリーズして悲鳴をあげました。

今覚えれば近所の住民の方には多大な迷惑をかけたなあ‥。

感想やご指摘のほうも待ってますのでよろしくです。

第八話・宗佑の眠れぬ夜～朝山美咲の場合～（前書き）

この話で眠れぬ夜は半分です。

実際この眠れぬ夜編が終わってからは七海との約束しか考えてない

：

第八話・宗佑の眠れぬ夜～朝山美咲の場合～

俺はいつもの習慣になつてこむのが、アラーム無しで早朝に起きた。多分俺の部屋では携帯がピロピロと「うわへへ」鳴つていてるだろ。

「あ～、ダルいな…。ていうか体が重い…」

「む～。起きたか。今は朝の六時だから寝てていいぞ」

「いや、俺は弁当を作らないと…」

「わざき体が重いと言つていただろ。一応体温計で計つておけ」

「ん、分かった。計り終わったら朝ご飯作るよ」

そう言つて俺は体温計で計りながら寝ぼけた目をこすつた。すると視界がはつきりとして、最初に見えたのは葵ねえの下着だった。

「はえつー～ああ葵ねえ！なんで下着をベッドの上に…？」
「ああ、すまない。昨日は風呂に入らず寝てしまつたからな。風呂に入らうと思いつ出しておいたんだ」

「じゃ、じゃあ仕方ない」「ペペペペ…」体温計に助けられた…？」

「あ、もう計り終わったか。さて、何度だつた…？」

言葉を言い終わる前に葵ねえは体温計を手に固まってしまった。
ん？ なんで固まつたんだ？ もしかしてそんなに高熱だったのかな…？

「ね、ねえ葵ねえ？ ビーツ」「これ以上動くな！ 安静にして眠れ！
は、はひい…！」

「まわか…。これなら休ませるか…、私は仕事があるし母さんも今
田は仕事か…」

「あ、あの…。俺は平氣だしそんなに高熱じゃないと氣が…」

「宗佑。お前は37・8度が高熱じゃないと言つのか？」

「マジですか。いやいやマジですか！？」

「なんでそんなに熱が出てるんだよ！ 俺は雨に降られたままで過いじ
たのか？」

「とりあえず今日は休め、学校に連絡は入れる。不本意だが美咲に
看病を頼むから安心しろ」「

「そう？ じゃあ迷惑はかけたくないし部屋に戻るよ。朝ご飯は食パンを焼いてくれる？」

「分かつた。くれぐれも死ぬなよ、死んだら私は後を追うからな

「怖い」と言わないでよ…」

俺は葵ねえに重い責任を投げつけられた後に自分の部屋に戻った。
そう言えば今日は美咲ねえが看病してくれるんだっけ？ 大丈夫かな？

俺はそう思いつつ自分の部屋に入り、ジャージとTシャツに着替えてベッドに寝転んだ。

「ふう……もしかして寝るときのこの格好が原因か？それとも過労か？……まあ早く治したいし寝るか？」

そう言つてなにもすることなく俺は眠りに付いた。

俺はよつほど疲れていたのか、かなりぐつすりと眠れそうだ……。だが、気持ちよく眠れそうになつていると俺の腹にもの凄い鈍痛が襲い掛かってきた。

「宗佑！カゼだつて！？大丈夫なのか！？」

「げふう……。美咲ねえ……ちょっとどびいて……」

「あ、ごめん……。大丈夫だつたか？」

あら？なんか凛といい美咲ねえといい珍しくしおらしいな……。
しかも美咲ねえへこんでいると犬に待てをしてるみたいでちょっと罪悪感があるな……。

まあ今度はヒジで腹を強打しないだろうし大丈夫だろう。

「大丈夫だよ。でも次からはちょっと注意してね」

「分かった。でも宗佑は大丈夫か？」

「うん。まあ熱もそんなに酷くないし、一晩寝れば大丈夫じゃないかな？」

「そつか。そりゃ良かつた！じゃあアタシとも一緒に寝れるんだな

「！」

「うへん…？あんまり俺はオススメしないけどね。汗かくだらうし、カゼもうつるかもしないし」

「別にいい！むしろいい！」

「むしろいい！？なんだか俺一瞬で美咲ねえが危なく見えたよ！？」

しかも俺がツツコんでる間に正面から俺に抱きついてるし…。
忙しくなくてカゼのせいか美咲ねえの胸が当たってるのがいつもより意識してるし！

心頭滅却俺！心を殺せ俺！感覚神経を消せ俺！－！

「ん？どうしたんだ宗佑？」

「ナ、ナニモナイヨ。ナニモナイツタラ」

「ふふつ…、もしかしてアタシに抱きしめられて意識してるのか？」

こんなときの美咲ねえの動物的直感は鋭いな！
いつもなら確立は半分ぐらいなのに…。

「…うん。お願いだからシバかないでください

「せうか、ふふつ。宗佑は葵みたいな奴が好きだと思つたが…」

「と、とりあえず眠いから寝ていい？だから離れてくれる？

「ヤダね。宗佑が寝るならアタシも一緒に寝る」

「はあ…、なにを言つても取り合ひへくれないよね?」

「勿論だ。それに今日はアタシの番だしな」

そつか。 そういうやうだ。

まあ寝てる間は可愛いものだらうし、カゼさえ注意してくれればいいか。

そう自分を納得させると俺は横になつた。
美咲ねえは俺が横になつたのを見てすぐ隣に、俺の頭が自分の胸のあたりにくるように抱きしめた。

「もうなんでもいいや。 おやすみ美咲ねえ」

「うふ。 おやすみ宗佑」

俺は美咲ねえにおやすみと言つて眠りに付いた。
いい所で起きたのも手伝つてすぐに深い眠りに付くことができた。
でもこんなに早く眠れたのは誰かがそばに居てくれるからかもしれないな…。

あれから何時間経つたんだろ?…。

最近は変な緊張やプレッシャーで全然眠れた気がしなかつたからなあ…。

このカゼは結構いい働きをしてくれたのかもしれないな。

「起きたか宗佑。もつ畠になつてゐるわ」

「もつ畠か……。じゃあ俺は畠飯作つてくれるな」

「待てーあの……な。今日は特別にアタシが作つてやつたからわ。……
食えーーー！」

「う、うん。これつてお粥だよね？」

美咲ねえが突き出した器の中にはお粥が入つていた。
まさかゲテモノを作つて食べるみたいな展開かと思つたら普通にお
粥だつた。

「さうだよーーー悪かつたな。特別な物じゃなくて」

「いや、お粥なんて久しぶりだしどうじよかつたよ

「そ、そつか?なら……アタシが食わせてやるーーー

「いや……自分で「ダメだ！」……まあいいか

「じゃあはーい。あーん」

俺は美咲ねえになされるがままにお粥を食べた。

「うん。普通につまーい。

てか、これなら隠し味入れれば俺のと変わらないんじやないか？

「どうだ?……もしかしておいしくないか?」

「いや、すげえうまい。まさか美咲ねえがこんなに料理上手だとは

思わなかつたよ

「…だつて宗佑に食べさせたかつたしな」

「ん? どうかした?」

「だからーー宗佑に食べさせたかつたんだー!」

「え…? あ、うん。… ありがと」

面と向かって言わると照れる…。

しかも美咲ねえも顔が真っ赤だから余計に照れる…。

「ほ、ほらーーもつと食べろよーー。」

「うん。 つけてちょ、そんなこ… 食えん…」

「あ、ごめん! 水飲めるか?」

「ふおふふおふー (訳…「うんうんー。」)

俺は美咲ねえから水をもらつて一気に飲み干した。

若干ノゾミにつかえたけど口に一杯より楽になつた気がする。

「…」めん。 いつも宗佑には面倒かけっぱなしだな

「別に大丈夫だよ。 それにその積極性は美咲ねえの個性なんだから

俺がそう言つと美咲ねえは涙目になつた。

そして俺にギュッと抱きかかってきた。

「うう…、そおすけえ…」

「え？え？俺なにかしたの！？」

「ありがとお…、ありがとお…」

「…うん。とりあえずどういたしまして？」

「そのまま俺は美咲ねえをあやしながら時間を過（）した。
しばらくすると美咲ねえが恥ずかしくなったのか真っ赤になつて離
れた。

そして俺は美咲ねえに薬を貰つて横になつた。

「ふう…、薬が効いてきたかな？ふあ…眠い…」

「無理せずに寝（）よ。アタシはずつと醒（）るからな

「うん、ありがと。美咲…ねえ…」

こうして俺は再びぐつすりと眠りに付いた。

眠るまで美咲ねえが頭を撫でてくれて安心したから気持ちよく眠り
につけた。

おまけ

「もつ寝たのか？宗佑はそんなに疲れてたんだな

アタシは直感で宗佑の調子が悪いことが分かった。

最近の宗佑は色々とありすぎて疲れてる感じがあつたからな。

まさか今まで練習していた料理が役に立つとは思わなかつたな…。

「んむう…、ありがと…美咲ねえ」

「まだ言つてんのか。…どういたしまして」

やつ言つて頭を撫でると宗佑はくすぐつたやつに、でもうれしそうにはにかんだ。

……いろんな表情をするからホレちまつんだよ。

「…なあ宗佑。宗佑はアタシの「と好きか?」

「ぐう…、ぐう…」

「…なんてなー聞いてるわけないか。…でも、いつかホレさせてやるからな」

やつ言つてアタシは宗佑の頬に軽くキスをして添い寝をはじめた。

……うつり…、やつて恥ずかしくなつてきた…。

アタシは多分顔を真っ赤にしながら宗佑と一緒に眠りに付いた。

第八話・宗佑の眠れぬ夜／朝山美咲の場合（後書き）

最近はこの小説も除々に人気が出てきて、アクセス数もかなり増え
てきました。

これも皆さんのおかげでございます。ありがとうございます！！
では、次回はどうなるのか考えていません！

この行き当たりばったり感もあわせてお楽しみください。

ご意見、ご感想の方も受け付けております。遠慮せずに送ってくだ
さい！

第九話・宗佑の疲れぬ夜～朝山凜の場合～（前書き）

遂に凜までたどり着きました。

最近は学校の方もいそがしいのでグダグダかも…。

第九話・宗佑の眠れぬ夜／朝山凜の場合／

俺は薬を飲んでからかなりの時間眠っていた。

最後に寝たのは昼過ぎだったから軽く十時間以上は寝てたな。
だって窓の外がうつすら明るいし。

「ふあ…。また微妙な時間に起きたな。まだ朝飯作るには早いし…」

「ん…？ あすけ？ まだ早いから寝ろよ。」

「いや、もう目が覚めたしね。美咲ねえは寝てもいいよ」

「うん…。そーする…」

そう言つて美咲ねえは再び寝息をたてた。

多分美咲ねえは遅くまで俺のことを見ててくれたんだろう。

うつすらと皿の下に隈ができるし。

「さて、久しぶりにゆっくりした朝だし散歩でもするかな」

俺はそう思いついたのでパーカーを羽織り、携帯だけ持つて外に出た。

季節は四月の下旬とは言え朝は少し冷える。

俺はここからそつ遠くない公園を目指して足を進めた。

「ふう…。ついで最近は忙しくて散歩なんて懐かしいな…」

俺は色々と感慨にふけつていると公園に着いた。

この公園は特に印象に残るものは無い普通の公園だ。

まあベンチもあるし水道もあるからマラソンなどの練習をする人は使ってるだろ？

俺はベンチに座つてぼーっとする」とした。

「あー…… やる」とねえ……

「なら走りなさいよ。運動して眠気を飛ばしなさい」

「うーっす……ん？ アンタ誰！？」

俺は今まで後ろに人が立っていることを知らなかつたので普通にビビつた。

俺の独り言に返答した人物は肩を少し超えるぐらいまで伸ばした髪を後ろでまとめている女性だつた。

格好はジャージにTシャツと言つラフな格好と聞つことは今までワニーニングでもしてたのだろう。

「びっくりするじゃない。なにいきなり叫んでるのよ

「それは俺のセリフだ！ いきなり後ろから話しかけるな！」

「男なのにチマチマうるさいわよ。男なら女性の[冗談]ぐらい気に止めない心構えでいいなさい」

「俺はイタリア人じゃねえ。それよりアンタ誰だ？」

「アンタじゃなくて白江綾子よ。綾子さんとでもよんでもうだい

改めて綾子さんを見ると顔は整つており、スタイルは抜群で身長も高い。

分類的に「言つ」と「可愛」と「言つより綺麗」の方が近いだろ。大人っぽいせいから「言つ」と「うかスボーティ」な格好がすこいく似合つてゐる。

「どうしたの？もしかして私に見とれてた？」

「まあ……そうですね。だつて普通に綺麗ですし」

「あら、素直な子ね。そつこや前のはなんて言つの？」

「あ、忘れてました。俺は朝山葵です」

「朝山宗佑ーー？もしかして朝山葵の弟ーー？」

「はあ……そうですけど……」

「「こんなとこ」で会えるなんて運命じゃない！テイクアウトでーー！」

「いやいやーーなんで知らない人に拉致られないといけないんですか
なんで綾子さんは俺を拉致しようとしてんだーー？」

いや、でも綾子さんは俺のことを知っていたよな……。

「あの……もしかしてどうかで会いました？」

「やっぱ覚えてない？葵が高ーーの時に一回会つてるんだけどなーー」

「高ーー俺は小五・葵ねえの友達?……！」

「お、気付いたみたいだね

「もしかして俺を帰り際に拉致しようとした人！？」

「これは俺の変な思い出の一ページだ。

俺が買い物から帰つてリビングに行くと葵ねえと友達が一緒に勉強をしてたんだ。

そして俺は挨拶してジューースを出した後に料理の準備をした。その後はたびたび俺は「私の家に来ない？」と聞かれまくったはずだ。

そして極めつけは帰るときに見送りに来た俺を抱えて拉致したんだ。確かにこの事件は結局葵ねえに捕まつて終わつたんだつけ。

「そこを覚えてたか？まあいいわ。それにしてもまた私好みになつてるわね…」

「ひい！また拉致するのはやめちえつ！…

「あはは！必至すぎで嘔んでるわよ。まあ拉致はしないから安心なさい」

俺はとりあえず安堵のため息を吐いた。

「まあ連絡先の交換はしてもうわよ。ち・な・み・にーこれは強制よ」

「…拉致されるよついいか。じゃあ俺から送りますよ

そうして俺は綾子さんと携帯の連絡先を交換した。

俺が送つたときに一択の不安が俺によぎつたのは氣のせいだと信じ

たい。

「よーし、いきなりデートの連絡とかするから覚悟しなさいよー。」
そうつ言って綾子さんは聞き捨てならないことをついて公園から走つて行つた。

結構時間が経つて、俺は急いで家に帰つて朝の支度を済ませた。

一番先に起きていた葵ねえに叱られたのはいつまでも無い…。

朝の久しぶりの出会い？から数時間が経つた学校の昼休みなつた。余談だが一日休んで学校に行くとサボつたと勘違いされるのは恒例だろう。

話を戻して昼休み。俺はいつもと変わらず七海と弁当を食べていた。

「そんで宗たんはカゼはだいじょぶ？」

「大丈夫。昨日は結構寝たからな、多分過労みたいなものだつたんだろう」

「ふうん…？宗たんが過労？別に過労になる原因はないんじゃない？」

「俺は家の家事をやつてるからな。多分疲れが徐々に溜まつてたんだろ」

「ほえー…。だから調理実習とかでも手際がよかつたんだね」

俺が答えた内容に七海はうんうんと頷きながら答える。

そして七海はなにかをたくさんだよつた顔をしてから、俺の弁当の玉子焼きを横取りした。

「あ、まあいいか。こんなにとこでじり立てたらまた熱が出る」

「ふうん、これが宗たんの玉子焼きか。どう見てもお母さんが作つた熟練の技だね」

「まあ俺は料理を小学校の頃からやつてゐるからな。熟練つて言つたら熟練だ」

俺が答えていた途中に七海は玉子焼きを口に入れた。
七海は一瞬目を輝かせた後、恨みの目線を俺に向けてきた。
俺がなにをしたと言つんだ。

「……私の作ったのよりもおいしこんな！」

「つむつーーお前はなぜ喜びながら怒るんだーー？」

「むーー。レジこよーー。乙女のアドバンテージである料理を取るなん
てーー。」

「なに言つてんだお前は。メンドくせえ奴」

「ヒドい！？ もー宗たんなんか知らない！」

そう言つて七海は弁当を片付けて自分の席に戻つた。

そのときに俺の玉子焼きをかつさらつたのは田をつむり。ひいむりしきり。

俺は小さなため息を吐いて残った弁当を食べた。

結局七海の方が我慢できなくなつたのか、「少しほは心配しろー。」

と俺に殴りかかってきた。

そして学校が終わり、俺はまっすぐ家に帰つて晩飯を作つてこる。
昨日は俺が一日中寝てたせいで晩飯は店屋物だつたらし。い。
ちなみに今日は麻婆豆腐とかに玉といつ中華を作つている。

「最近は中華の素みたいなのが増えて助かる」

「こわなり何を言つてるんですか。それと豆腐は切りましたよ」

「お、ありがと。それにしても美咲ねえと凜は料理ができたんだな
「女性にそんな質問したら殴られますよ。それに料理はできて損する
ことは無いです」

「まあそりだよな~。…よし、麻婆豆腐はこれでいいか

「かに玉は私がやります。兄さんは泊りたてなんですから休んでく
ださい」

「いめんな。気に使わせて」

そう言って俺はHプロンを外して部屋に戻つた。

部屋で充電していた携帯のライトが点滅していたので携帯を開くとメールが来ていた。

そして差出人を見てみると七海からだった。

『忘れてたから連絡するよ！

今度の日曜日のお昼に駅前で待つてね』

今度の日曜か。

そういうやなせ俺は一緒に出かけるので許してもうえるんだ？
う～む、女はミスティーリーとはこのことか。

その後俺は凛に呼ばれてリビングに行って食事をした。

綾子さんが教えたのか、食事中は葵ねえにずっと朝のことを質問された……。

時は過ぎて俺は風呂に入り終わってすっきりしたところだ。

俺が洗い物をしていると凛が「お風呂の後に部屋に来てください」と言わされたので向かっている。

とは言つても階段を上がるだけなので一瞬でついた。

「凛？ 入つていいか？」

「は、はいーどう入つてください」

俺は凛の了承をもらい凛の部屋に入った。

正確には凛と夕菜の部屋だが、夕菜は今日のところは俺の部屋で寝てもらつている。

「 よつじん兄さんさ。 バーバーバーバー…」

「 えつ？あ、 エリサ…」

そつぱわれて俺はベッドの上に座った。
なんかやけによれよれこな…、 逆に怖いんだが…。

「あ、 あの、 兄さん…ちよつと両手を挙げてくれますか…？」

「お、 ゆつ。 挙げるけどなんさ 「 兄さん…」 むおう…？」

俺が両手を挙げてばんざこをすると、 俺の胸に向かって凛がタックル並みに抱きついてきた。

うれしいんだがアバラが痛いなあ…。

「はふう… 兄さんのお…」

「 うふ、 ちよつとーなこしてんのー…？」

「 なにつて補給してんさよ。 今田は私が兄さんを強占する田なんですか？」

「 やうなのか？ いや、 でも、 ん？まあ… そなのが…？」

「 やうなんです。 今は兄さんは私のものです」

やつぱり俺は豹変した凛に、 感じつて腕が疲れたので下りすつてに頭を撫でた。

すると凛は少しビクッとした後そのまま俺のひざの上に乗った。

凛は先に風呂に入っていたで頭からコンスの匂いがしてきて頭がかしくなりそうだ。
しかも体がくつついでいて、凛の体温がそのまま感じられることができてしまつ。

「…………凛。せめて隣に座つてくれ」

「嫌です。…………兄さんには少しでも私を意識してもらひますか
」

「まだばつたり答えたな……。ふあ……」

「兄さん? もしかして眠いんですか?」

「ん? まあちよつとね。今日は微妙な時間に起きたし」

「じやあ今日は早いですが寝ましょうか。まあ、寝転んでください
俺は言われた通りにベッドに寝転んだ。
すると凛は俺の皿の前に寝転んで、背中がくつついで近づいてきた。

「う、近くないか? もちよつと離れてても……」

「嫌です。それに兄さんだつて私のおなかに手を置いてるじゃない
ですか」

「す、すまん!」

「別にいいですよ。逆にそのままこじておこつてください」

「お、おひ。でもここのか？凛も好きな男がいる年頃だろ？」

「…鈍感ですね」

「なんかそれ七海にも言われたな…。ふう…もつねるわ

「ふふっ、おやすみなさい」

俺は凛の暖かさもあり、すべて起きた

おまけ

私は我ながらほしゃいでしまった気がする。
とは言つてもこれは全部兄さんが悪いんです。あんなさりげなく優
しくするの反則です…。

「むこう…、すう…」

「はふう…可愛この寝顔ですね…」

私は後ろを向いて兄さんの顔を見ると自然に笑みが出た。
起きているときは料理を教えてくれたり頭を撫でてくれたり優しい
のこ、この無防備な寝顔は反則的に可愛い。

…あ少し他の女人に優しすぎるのは困り者ですが。

「でも…こんな風と一緒に寝るのは私の特権です」

「のふひー…むこう」

「危ないところですね。あまり強く抱きつくな起きてしまいしますね」

私は力を緩めて兄さんの方を向いて抱きついた。
これなら今日は快眠ですね…。
こうして私も眠りに付いた。

第九話・宗佑の眠れぬ夜～朝山凜の場合～（後書き）

なんだか部活疲れでおかしくなった作者です。
まさか自分でも考えていない新キャラがでてきました。ええ、想定外です。

それに凜もすごい豹変しましたね。驚きです。
ちなみに新キャラの綾子さんの髪型はトウハートの春香さんのイメージが近いです。

「」意見、「」感想の方は遠慮なくどうぞ。

第十話・宗佑の眠れぬ夜～朝山夕菜の場合～（前書き）

最近は更新が遅くなつたので早めにと善処しました。
まあ内容がグダグダになつたらスイマセン…。

第十話・宗佑の醒れぬ夜～朝山夕菜の場合～

俺はいつも通りの携帯アラームで起きた。

時間は六時ちょっと前に設定してあるため、もし凛が起きたら不機嫌になるんだろうな…。

「凛～？」

「んう～…」

よし、これならぐっすり寝てるな。

俺は抱きついている凛をゆっくりはがすと、自分の部屋で制服に着替えてキッチンで料理を始めた。

今日は残り物があり無いので弁当のおかずは作っている。

「ふあ…。やっぱひなひなと熙いな

「ただいまあ～…。そーすけ起きてるう…？」

「母さん?今回結構早かつたんだね」

いつの間にやっせんが帰ってきていた。

だがおかしい。いつもならデザイナーの仕事で五日間は絶対に忙しいはずだ。

それが三日で帰つてくるなんて…。

「聞いてよお～、おかーちゃん酔つちゃったんだあ～

「それは見れば分かるけど…。とりあえず早い理由を教えてくれな

い
?

「えっとねえ…。今回は私の出番がちょっとしかなかつたんだ…。
それで早かつたのだ…！」

「…それで不機嫌になつてヤケ酒か。とりあえず水飲んで部屋で寝なよ」

「ふあ～い。そーすけ運んで～」

「……はあ。分かつたよ」

そう言つて俺は母さんに水を飲ませてから母さんの部屋まで運んだ。
まあ小柄で酔つてたから全然辛くはなかつたけど。

結局母さんを寝かした後に急いで朝食と弁当を作ったせいで疲れた

そしてみんなを起こしてから朝食を食べて学校に向かった。

学校で授業を受けて休み時間になつた頃、俺はなぜか同じクラスの男子Aに呼ばれた。

確か高田だつたか？高田は悩んだよつた不安なよつた顔で俺に質問をしてきた。

「なあ…、朝山つて上と下に一人ずつ姉妹がいるんだよな?」

「ね、別に隠す」とじゃないからな。それで本題はなんだ?」

「じ、実は、な。俺はお前の姉ちゃんが…好きなんだ」

「ふうん…、ん?姉ちゃんってどうちだ?」

「ほらーーのじやねえかークールビューティーな姉ちゃんがさー。」

葵ねえか。そういうやつって葵ねえのこと見たことあったか?まあストーキングしてねえならいいが…。

「そんで?俺はじつと聞つんだ」

「お前が連絡取つてくれよー連絡取れるのはお前だけなんだからさーーーのとおつだ!」

「うー、十手座すんな。分かったから顔上げろ」

そつと高田は田を輝かせて喜んでいた。

俺はその姿を遠田で見つつ葵ねえに連絡を取るため、携帯にかけてみた。

『もしもしーー宗佑からは珍しいな。何か用があるのか?』

「いや、俺じやなくてクラスの男子なんだけど。替わつていい?」

『…宗佑じやないのか。まあいい。仕事もあるから早くしてくれ』

「うふ。ごめんね。…ほれ、今繋がってるから」

そう言って俺は高田に携帯を渡した。

高田は「お、お、お」と緊張した面持ちで携帯を受け取った。

「も、もしもし。俺は宗佑君と同じクラスの高田吉輝です。」

『そりか。いつも宗佑が世話をなつてゐるな』

「と、とんでもない! むしろ俺が世話をなつてます。」

『そりなのか。で、私に用と言つのは何かな?』

「それは、すーはー。あなたのことが好きです! 付き合つてくれませんか!」

おー、大胆な告白だな。

クラスの奴だけじゃなくて廊下の奴も野次馬に来てるじゃないか。

『……すまない。私には悪い続けている人物がいるんだ』

「や、そりですか?。『メンなさい、いきなりこんな事言つて』

『いや、その気持ちがあれば私以外の人物は振り向くぞ。君はまだ若いんだからがんばれよ』

「は、はいー。ありがと! おこまますー!』

高田はそう言つと俺に携帯を渡した。

田には涙を溜めて、だがすつきつとした顔をしてゐる。

「ありがとな朝山ーじや、俺はちょっとトイレ行ってくるー。」

「おひ。次はがんばれよ

「言われなくても!」

高田は走って野次馬を押しのけてトイレに行つた。
…同情しない方がいいだろう。

『宗佑? もう切つていいか?』

「あ、うん。仕事がんばってね」

『ああ。宗佑も勉強をがんばれよ

そう言って葵ねえは電話を切つた。

野次馬たちも終わつたのかと黙つて自分達の教室に戻つていつた。
なんだか気疲れしそうな休み時間だつたな…。
それから高田は四時間目の途中で帰つてきて、目の周りは真つ赤になつていた。

今日も一波乱あつたが無事に家に帰つてこれた。

このままじゃ俺に被害が来ると考えるとかなり怖い…。

「はあ…、だが今日を切りければ自分の部屋で寝れるんだ…。がんばう!」

俺は考えを前向きにして調理にかかつた。

今日は葵ねえが仕事で帰つて来れないので一人分少ない。

「そーちゃん！今日は私の番だね！」

「…そーだな。その前に飯作らせん」

「分かつた～。じゃあね～」

何事も無かつた様に夕菜は自分の部屋に戻つていった。結局その後も何度も俺の元に来て、同じ質問をしては部屋に戻つていた。

「よし…。できたな」

「できたの？じゃあみんなを呼んでくるね！」

「…夕菜は気配を消して背後に立てるのか……」

俺は妹の妙な才能に驚きつつみんなの分をよそい始めた。

今日は葵ねえが仕事でいなくて母さんは一日酔いでずっと寝てるの四人分だ。

久しぶりに少人数で食べたからか、妙に静かに感じた。と、言つより夕菜が一人で騒いで、美咲ねえと凜が静かに怒つっていた。

「うわーーさまーーそーちゃんそーちゃん！分かつてる？」

「分かつてる。風呂はもう入れたから勝手に入れ」

「わーいー。じゃあ待つてるからね！」

「……………」

「…………一人とも怖いよ」

結局夕菜は凄いスピードで晩飯を平らげて風呂に行つた。
そして静かな一人のオーラに押されながら俺は晩飯を食つた。
みんなが食べ終わつてから、俺は洗い物をして洗濯をし、風呂に入
つた。

「はあ……、今日が金曜だから……明後日は七海との約束だな」

俺の学校は土曜は休みだ。ゆとり万歳。

俺が土曜まで学校に行つたらまた過労でバタンキューだろう。

「ヤベ、のぼせてきた。そろそろ上がる」

そう言つて俺は浴槽から出て扉を開きバスタオルを取つた。
そして頭から体の順で拭き、寝る格好に着替えて廊下に出た。

「あー気持ちよかつた」ちえいー」のわあつー?」

「なんとおー?避けるとはー!」

俺にいきなり上段回し蹴りをしてきたのは夕菜だった。
しかもジャンプまでして俺のコメカミを狙つたな!?

「そーちゃん避けちやだめだよー!」

「避けるわーなにトチ狂つてんだー!」

「あのおお氣絶すればこいものを…。なりませ攻法でー。」

「そつ言つて俺は懷に飛び込んできた夕菜の頭を掴んだ。一瞬動きが止まつたと思えば、いきなり腕を振り回した。

「やーん…放してよー。」

「お前みたいな危険なやつを離すわけないだろ？」「

「うう～失敗した～」

「失敗？なにをしようとしたんだ？」

「向つて…勿論…氣絶させてやーちゃんを私の思つがー」と…」

「あー、早く寝るわ。お前は頭がおかしくなつたんだ」

「やーん。」

俺は頭を掴んだまま階段を上がつて夕菜の部屋に来た。今日は凛と交代で、凛が俺の部屋で寝てこる。

「まれ、早く寝ろ」

「えー、やーかやとも一緒に寝る？」

「ああ。俺は眠いからな

「じやあ。ベッドで仰向けになつてくれない？」「

「…？勿論そのつもりだが？」

俺は言われたままにベッドで仰向けになつた。すると俺が寝転んだところを見てか、夕菜は俺の上にかぶさなつにして寝転んだ。

「わあ～い。そーちゃんが近あい

「お、おいーいくらなんでも近すぎるので…」

「別にいこじょん。私はこうしたいの一

俺が夕菜をじかそうとすると夕菜は俺に抱き付いてきた。ちよ…、前向きだと俺が色々と意識してしまつ…！

「ん？どうしたの？顔が真っ赤だよ？」

「な、なんでもない。頼むから上は妥協して横にしてくれないか？」

「い・や・だ・よ それに眠いなら寝れば気がならないよ

「でも…、あーもうこーー寝返りつつたきこ落ちても知らないからな！」

「はーい じゃあお休みーー

俺は少し体が熱いことは無視して寝る努力を始めた。

すると人間とは不思議なもので、案外すぐに眠ることができた。あ…明日は自分の部屋でゆくべつ寝よつ…。明後日は約束があるし。

おまけ

そーちゃんは私の言葉を受けて本気で寝てしまった。
おまけといふとお話をしたかったな〜。

「すう…

「…昔から寝るの早いよね。なんだから

私は少し考えてみると結論にたどり着いた。

そーちゃんはいつも私達が寝てるとかひい顔い飯とお弁当を作ってるんだ。

「そっか、だから早く寝てるんだね

「ん…

「ひや、ひやわー…」、いきなり起きるよ

そーちゃんは寝しきったのか、私を抱きしめて寝返りをうつた。
そのときに抱きしめた場所が背中とおじりだったから変な声がでち
やつたよお…。

「ん…

「ひ…、…おまけ、案外気持ちいいかも」

勿論お尻を掴まれたからじゃないよ。勘違いはNGだよーー！
今度は普通に抱きしめてくれたから気持ちよかつた。

「ふあ…そーちゃんの匂いだあ…。んにゅ~」

私はそーちゃんを抱きしめて眠りに付いた。
はあ…、これはクセになっちゃいそ。

第十話・宗佑の罪れぬ夜～朝山夕菜の場合～（後書き）

なんか執筆中に迷つたんですが、夕菜が変態化してない？
思つたよりブリックン度が高くなつちやつた夕菜ちゃんでした。
次回は宗佑の解放された土曜日ですね。

「」指摘、「」感想の方は隨時お待ちしております。遠慮なくどうぞ。

第十一話・つかぬ間の休息？～前編～（前書き）

ヤバい……構想が……固まりません……。

次は七海との“デートなんですが……。

それによく卒業シーズンで働かされたせいで疲れて眠い。

第十一話・つかぬ間の休息？～前編～

俺は今日、携帯のアラームではない方法で起きた。
俺がなぜ起きたか。それは携帯のメール音で起こされた。
・大差ないのは気にするな。

「うん？アラームの直前でメールが来たのか…？」

俺は携帯を開いてメールの差出人を見た。

差出人は俺にとつては天敵になりえる人物である綾子さんだった。

『今から公園に来て。来ないと襲うわよ』

「…………ええ！？なに最後に危険な文足してんだよ…！」

「うにゅう…？朝から元気だねえ…？」

俺が一人で騒いでいると夕菜がむくつと起き上がった。

「起…したか？まだ早いし休みだから寝ていいぞ」

「う…ん。そ、する…」

幸い夕菜はまだ眠気が残っていたのすぐに眠ってくれた。
俺は部屋に戻つてパーカーを羽織り、走つて公園に向かつた。

俺は走りすぎてクタクタの状態で公園にたどり着いた。すると前に俺が座っていたベンチに綾子さんは座っていた。

「ゼエ…ゼエ…。お、お待たせしました…」

「お、早かったわね。メールしてから五分以内で来るなんて」

「ど、ど…。それで…用はなんですか?」

「用?別にないわよ。ただ会いたかっただけ」

そう言われた瞬間、俺は膝から崩れ落ちた。

まさか崩れ落ちるとは思わなかつたから自分でもびっくりした。そしてそのまま重力にしたがつて体が後ろに倒れていつた。

「あら?大丈夫?」

「はい…、ただ気が抜けました…」

「ふうん。今つて動けない?」

「動けますけど動きたくないです。しんどいですし…」

「ふうん…、今なら宗佑君は動けないと…」

綾子さんは一やつとなにかを企んだ笑いをすると俺の上にまたがろうとした。

まさかマウントポジションを取られるとは思わなかつたので俺は体を動かした。

しかし体力が底をぬきかけている俺は「ロロッ」と転がって避けた。

「むっ…動けないって言つたじゃない…！」

「誰でもマウントポジションは避けるわー！」

俺は立ち上がりてジャージについた砂を払つてパークーも脱いで払つた。

そしてパークーを羽織つて綾子さんに向きなおした。

「ナマイキね～。宗佑君は黙つて私の思つがままになればいいのよ

「俺に人権はないのか！？」「スキあり～」へあつーー？」

「ほれほれ～。お姉さんに抱きしめられた感想はどうぞ？」

正直言つて理性がヤバいっす。

俺の方が背は高いと言つても綾子さんも女性にしては高身長だ。つまり俺の胸板のところに綾子さんの柔らかいのが当たつていたりするわけで。

「ふふつ、宗佑君も男の子なのね。顔が真つ赤よ～？」

「なつー？そ、そりゃ赤くなりますよ…」

「へえ…、もしかして欲情してるのかな？」

「そ、そんなわかるかーー！」

そう言つて俺は後ろにバックステップで下がつた。

綾子さんはスニーカーだったので「ケたりせずにバランスをとった。俺は多分かなり顔が赤くなつてたと思う。すげえ顔熱い…。」

「はははっー『メン』『メン』。さすがにからかい過ぎたわね

「はあ…、せつかくの休みに疲れてるのはなぜだ…？」

「そう落ち込まないでよ。ほら、ジューース買つたげるから」

「別にいいですよ。それより帰つていいですか？ そろそろみんな起きるんで…」

「そつか、そつこや家事をやつてたんだっけ？」

「そうですよ。そろそろ朝食がいる人に朝食を作らないといけないので」

「ふうん…。ねえ、私もいつていい？と言つより朝ご飯食べさせて」

俺は多分拍子抜けしたと言うかポカーンとしてたと思つ。一瞬反応速度が遅れて呆けていた。

「え？でも、綾子さんはちゃんと用意してないんですか？」

「女が全員料理はしないのよ。私はできるけど面倒なタイプよ？」

「なんか後付けみたい…」「なにか言つた？」ナンデモナイデス。タベテイキマスカ？」

「ええ。それと私はトマトが嫌いだからヨロシクね」

怖いなあ…、葵ねえに負けない威圧だ…。

まあ葵ねえの友達だし類は友を呼ぶとも言つ。

俺は自分で中でそう考えて終わらした。

そのまま俺は綾子さんを連れて自分の家に戻つていった。

道中なにもなく家に着いたので俺はキッキンで料理を、綾子さんはリビングでくつろいでいる。

今日は一応サンドイッチを作つてしまつと想つていたので作つている。

綾子さんのコクエストであるトマト抜きの野菜ハムサンドも作つてある。

「ふう…結構多めに作つたな…。まあ時間が経つても軽くつまめるからいいか」

「宗佑くーん。朝、飯できたー？」

「今までおましたよー。…よし、目に盛つたし運ぶか」

俺は皿に盛つたサンドイッチをリビングの机に運んだ。すると綾子さんは俺にむかつて驚愕の表情を浮かべていた。

「な、なんで…。なんで女の私より上手なのよー。」

「年数の問題です。あ、それとトマト抜きはそつちの一角ですから

「ありがと。… つむはばぐらかなことでよ。」

「ちゃんと答えは出しましたよ。年数の問題です」

「う…。まあ私も一人暮らしへ一年目だけね…、私にもプライベート

が…」

綾子さんは下を向いてブツブツと念仏のよつて囁きだした。
なんか後ろに「マンガで見るような落胆のイメージが見える気がする。
俺は腹が減ったので綾子さんは自然治癒に任せてサンデイッチを食べました。

「ムグムグ…。あ、『コーヒー淹れよ』

「もういいわー食べよーあつ、私はブラックでね」

「分かりました~」

俺はキッチンに戻つてインスタントを一つ淹れた。

綾子さんは「ブラックだが俺は朝はミルクを入れる派なのでミルクを入れた。

一つとも淹れたのでマグカップを一つ持つてリビングに戻つた。

「どうだ。今日はインスタントですが我慢してくださいね」

「別にいいわよ。『コーヒーなんてよつぱんじゃなことマズへないし』

「ナリですか。それならよかったです」

「そんな質問あるつてことは家に「ホールド」がいるの？」

「うーん…別にそこまでじゃなくてけど葵ねえですかね？」

「やつぱつー葵は料理が苦手なのに味につるせてのよねー」

「わつなんですか？俺は別にそこまで見えませんけど」

俺が答えると綾子さんはまたムズッとした。
そして「ホールドを一口飲んで答えてくれた。

「…………宗佑君は料理が上手なのよーしかもこの味は並の喫茶店より
おこしくわよー」

「そんな大声出したらみんな起きちゃいますって…」

「別にいいわよー見つかったら宗佑君の彼女だつて言つからー」

「それは俺にとつて危ない選択肢だー頼むからやめてくださいー」

「イ・ヤ・よ わの中には既成事実つて便利なものがあるのよ

「なにがあるんだー?とにかく思つておつてくださいー」

「はははつー冗談よ、ジヨ・ウ・ダ・ン」

はあ… よかつたあ…。

それよりみんな起きてないよな…?
さすがにこの状態で起きてきたら勘違いされかねん…。

すると今まで気付かなかつたが、玄関からリビングに向かう足音が

聞こえてきた。

「ただいま。今帰つた、ぞ……」

「あ、おかえり……。葵、ねえ……？」

「宗佑。ちょっと話があるから私の部屋に来い」

やつべえなあ……。

まさかこのタイミングで仕事から帰つてくるとは……。葵ねえの仕事が長引いたことを忘れてた……。

「お、久しぶり葵。元気してた？」

「お前……綾子か!? また宗佑を拉致しにきたのか!」

「そう構えなくともいいじゃない。今日は宗佑君の同意を得て上がつてるわよ」

「……そつなのか?」

「うん。今日は散歩してたら偶然会つてね。朝は作るのが面倒つてことで来てるんだ」

前は朝早くからどこに行つてたかで叱られたから綾子さんと会つたことは言つていない。

俺は比較的に嘘のときに表情にでないから大丈夫だとは思つが……。

「……そつか。それで多めにサンドイッチが作つてあるわけだな」

「わづめ。ちなみにマトト抜きもちゃんと作ってくれたわよ」

「まだマトが嫌いなのか。あれほど好き嫌いは治せないと

「

「別にいいわよ。好き嫌いで死ぬワケじゃないし」

「はあ……ちつちつ。着替えてくる

そう言って葵ねえは自分の部屋に戻つていった。

まあそれからは想像できる通り、葵ねえと綾子さんと話をしていた。

途中で俺は自分の部屋に戻れと言われて戻つたがなにがあったのか？

第十一話・つかぬ間の休息？～前編～（後書き）

なぜか朝の話だけで一話使っちゃいました。

書く前は全然アイデアが浮かばないのに書いてこらつひで浮かんでこつなりました。

とりあえず旧友との再会ですね。

次回は後編。宗佑に平和な休息のひと時は訪れるのか…こうじて期待。

ご指摘、ご感想の方は隨時お待ちしております。ご遠慮なくどうぞ。

第十一話・つかぬ間の休息？～後編～（前書き）

タイトル通り後編になります。

前回は登場人數が少ないので前後編に分けました。
眠いので意味不明になつていたらスイマセン…。

第十一話・つかぬ聞の休息？～後編～

俺は葵ねえに言われて部屋に戻つたが、なにせやることがない。ヒマでしかたないので俺は一回読んだ小説を読み始めた。ちなみに読んでいるのは「もじドラ」だ。「ラジオ」だ。これが結構面白い。

「…………」

「わ～すけえ～。おかーさんだよ～」

なるほど、そういう考え方もあるな。
いや、この本はなかなか侮れないな。

「…………」

「そーすけ？ねえねえ、聞いてる？？」

「…………」

「ひつぐ～、ねえ……そーすけえ……」

なるほどなあ。

これは考え方でマネジメントの捉え方は変わるんだなあ。

「…………」

「うう～、無視しないでよ～。そーすけえ」

俺はもうじドラを読んでると肩を搔きぶられた。

そして栄を挟んで揺さぶった人物を見ると今にも泣きそうな顔をした母さんだった。

「ど、どうしたの…？なんていきなり泣きかけなの…？」

「モーすけのせいだよお…。うええええええん！」

「えー？えー？俺のせい…？一体なにがあつたんだ…？」

俺がなぜ泣きかけなのか聞いたたら突然泣き出してしまった。一旦俺は母さんを慰めつつ理由を聞いてみた。

「せつから呼んでたのに…。う…ひっく…」

「あ、せつから…とか。『めん、俺ずっと本に集中してたから…』

「う…、おかーさん…嫌いじゃない？」

「う…嫌いじゃないよ。だから泣き止んで。ね？」

「…うん。ありがとそーすけ」

母さんは俺にありがとうと泣き疲れたのか、すやすやと眠ってしまった。

なんだか普通に赤ん坊みたいな寝かただな…。

俺は母さんをベッドに泣かせてからリビングに下りていった。

「せつこや時間はもう昼だな。今日の昼飯は炒飯でいいや

「宗佑…？おはよつ…？」

「美咲ねえ？もしかして今起きたの？」

「うん…。今日は休みだからな…」

「もしかして一度寝するの？」

「うん…。とか超眠いし」

「わ、じゃあおやすみ。休みの内に生活リズムが狂わないようにね

「うん、別にだいじよぶ。おやすみい…」

「うやら美咲ねえはリビングに水を飲みに行つただけのようだ。なにもなかつたと言つことは綾子さんは帰つたんだろう。俺はリビングに降りてキッチンに立ち、早速炒飯を作りだした。

「あ、サンドイッチでハム使いきつてる。今回は卵だけでいいか

「モーちゃんー。今日のお皿はなあ」

「夕菜？モーちゃん起きたんだ？」

「ん？ と前から起きてるよ。それがどつたの？」

「いや…、俺が起きたときには寝てたからな

「起きた後は部屋でゴロゴロしてたもん。凛ちゃんは学校に行つて生徒会だよ

なるほどね。……ん？

じゃあ凛は俺と綾子さんが居たこと知ってるんじゃないかな？

まさか変な勘違いして怒つてないよな…。

俺が中華鍋に気をつけつつ考え事をしているとリビングの扉が開いた。

「…ただいま」

「おつかれりーーーおろ？なんか不機嫌だね」

「そう？私はそんなに怒つてないわ。勘違いよ」

「ん？…？ま、いつか」

「おかえり凛。炒飯作つたけど食べる？」

「…ええ、いただきます。少し多めに持つてください」

「珍しいな。凛は比較的に少食なの」

俺がそう質問すると凛は爽やかなのに怖い笑みを浮かべて振り返つた。

そして俺の元までスタスターと早足で近づいてきた。

「ええ。兄さんが年上の女性を家に連れ込んでたせいで朝は食べなかつたので」

……怖え。

なぜか年上と女性だけにアクセントを加えてたのが気になるが、そ

れより怖い。

春の陽気が気持ちいいリビングのはずなのに冷や汗が止まらないよ
…。

「ねえ兄さん？ 朝いた女性は誰なんですか？」

「えーと、ね。綾子さんは…葵ねえの友達ダヨ?」

「なんで疑問文で答えたんですか？ それに姉さんの友達と兄さんに
なぜ関係が？」

「友達は本当ですー。綾子さんは昔にちよつとあつたんですー。」

「昔にですか…。まあ兄さんがトラブルに巻き込まれやすいのは知
つてますし」

「（た、助かった…のか？）じゃ、じゃあ炒飯できたし食べようか

「やつたあー！ 炒飯だあー！」

「ふう…言つたとおり私は多めでお願いします」

「はーはー。じゃあ座つて待つてくれ」

俺は三人分の炒飯を盛つた後、リビングのテーブルに運んで三人で
食べた。

予想通り夕菜がおかわりをしていたので多めに作つてよかつたと思
う。

三人が食べ終わつてからは洗い物をして部屋に戻つてもしドラを読
んで時間を過ごした。

まあ母さんがまだ寝てたから勉強机で読むことにした。

俺が本を読み出しが数時間経ったころ、母さんが「う」とやーーー。」

と言つて飛び起きた。

まったく意味が分からぬだろう。俺だって分からぬさ。

「どうしたの？ いきなり叫んで」

「猫に…猫に…、猫にいじめられたあ…」

弱つ！母さん弱すぎるだろ…。

なんて猫はいしめられるんだよ……夢だけとまあ夢にうなされて威嚇したんだろう。

「それで猫を威嚇したんだね。それとおはよう」

うん、ねえよー。そーすかのババア気持いいにねー」

「そう？ 多分みんなと同じだと思ひます」

「はふう…、また寝ちゃういそ」

寝るな。寝てもいいけど自分の部屋で寝ろ。」「

「そーすけのけちんぽ。いーもん、部屋に戻るから!」

母さんは寝起きでふりふりの呪つわで部屋に床つてこつた。

……さて、続きを読むか。

ひつて俺の休みは本を読むことによつて過ぎてこつた…。

第十一話・つかぬ間の休息～後編～（後書き）

なんか内容は短いですね…。

次回はもひとつがんばりますんで許してください！

「意見、感想は隨時受け付けておりますので遠慮なくどうぞ。

第十一話・田羅田の約束（前書き）

ちょっとの間書けなくてすいませんでした。
まあ書けなかつた理由は活動報告を見てくれば分かります。

第十一話・田舎の約束

昨日は我ながら平和な一日を過いしたとゆづ。

平和な時間とはあつといつ間に過ぎて、今日は七海との約束の日だ。
俺は先に昼飯を作り置きしてから駅前に向かった。

そして走つて駅前に向かったので若干早かつた気がする。

「うへん…、もしかして早すぎたか?」

「あ、宗たん…」

俺の前方から声が聞こえたと思えば、声の主は七海だった。
宗たんなんて呼び方で呼ぶから俺に注田の田線が当たつている。

「お前はやの呼び方やめる。すげえ注田やねーの」

「じやあなんて呼ぶの?宗助君…は堅苦しい…やっぱ宗たんでいいや」

「一人で納得すんな。…まあこいや。今日はどこへ行くんだ?」

「えーとね、最近できた遊園地に行こつかなーって」

あー、確かそんな感じの話がクラスであつたな。
俺は興味なかつたが確か隣町だつけ?

「わあわあ行!」一もたもたしてたら時間がなくなるよ。」

「のわあつー?腕をそんなに強く引っ張るなつて!」

こうして俺たちは電車に乗つて隣町に向かつた。

電車の中は休日だが遊園地に向かう客でそれなりに混んでいた。まことに詰め合いで、結構楽だった。

ところ変わつて遊園地のゲート前。

俺たち二人はエリトの前にできた行列に並んでいた。

「我慢しろ。まだオーブンして田が浅いんだ、混んでるの当たり前だ」

「でも疲れた！」

「我慢しろつての……。……あ、列が進んだぞ！」

「やつとかの…」

俺たちはチマチマと進んでいる列に數十分並び、やつと入場できた。入場するなり七海は俺の腕を引っ張つてジエットコースターの列まで走らせた。

スフリーで乗れる。

「よーし、今日は景気付けにこれからだーー。」

「マジかよ……。絶叫系は俺一ガテなんだが……」

俺がそう言ひと七海はひからをキラキラした目で見た。
いつもの猫のような可愛げな目ではなく、いたずら好きな子供がな
にか企んだ目だ。

「ほしーならなおせり乗るよーー！そして次はフリー フォールだ

な、てめ……。俺の二ガテなアトヲケシミンは、か……」

「にしにしにしー宗たんの約束じやなんでも言ひこと聞くんでしょ？」

「よーし! じゃあ一番前を陣取るよー! 」

じひつじはらくは俺の「ガチなアトラクションが続く」とこなつた。

結局シニ、口二入外は一晩前に男ることになり、俺は結婚方心状態になつていた気がする。

「ふいっ」。あー楽しかった！」

「あー……マジでかつた……」

「よーし、それじゃ次はフリー フォールだ。優先バスでスイスイ行
くよ~」

「勘弁してくれ……」

俺は今日から遊園地に行くときは優先バスは買わないことを心に決めた。

フリーフォールはあの特殊な足の浮遊感と風圧を嫌というほど味わつて終わった。

終わったあと俺は足は歩く感覚が鈍いからフフフフフだつた。

「いやー絶景だったね。すごく高いから遠くが見れたし

「お前の心臓にはワイヤーが生えてるのか？普通ならそんな感想はない」

「せうなの？私は普通に楽しめたよ？」

「俺は終始体をショイクされたことしか頭になかった

「まあ慣れだよ慣れ。じゃあ次はバイкиングね～」

そう言つて七海は千鳥足みたいな俺を引っ張つて連れて行つた。多分これ以上絶叫系に乗つたら平行感覚がなくなると思う。俺が抗議する間もなくバイкиングに連行され、体が吹っ飛ぶかと思う体験をした。

俺はバイкиングから降りたときには顔がグロッキーになつていた。

「おえ……気持ち悪っ……

「もー。男の子なのにだらしないよ～」

「俺は体の外は丈夫でも中身は纖細なんだよ。お前みたいに頑丈じやねえんだって」

「むつ！失敬な！私だって纖細な女の子だよー。」

「はいはー。そんじゃ次はなんだ？」

「んじゃあ次はあっち！！」

そう言って七海は俺を連れまわした。
俺たちは乗つていらないアトラクションに乗つたり、もう一回乗つたりして時間を忘れて遊んだ。

ふと気づくと空は夕日でオレンジ色に染まり、園内にいる人もまばらになっていた。

「お、もうひんな時間か。七海、もう帰るか？」

「え…。あ、うん。もうひんな時間なんだね…」

俺が帰るかと聞いた瞬間、七海は驚いた表情をした後に悲しげにしぶやいた。
そんな顔をしている七海が放つておけず、再び声を掛けた。

「で、どうする？俺は今日一日は七海の言いなりだからな」

「つーうんーじゃあ最後に観覧車行こつー！」

俺が言つた一言に七海は笑顔を取り戻して観覧車へと俺を引っ張つた。

俺たちがいた場所は観覧車に近い場所にいたのでかなり早めに乗る

「…」

観覧車に乗つてから数分。俺たちは一言も話していなかつた。

「…」

「…」

俺たちは互いになにも話さずに観覧車に乗つていた。

すると静かなのが我慢できなかつたのか、七海が話を振つてきた。

「ね、ねえ。宗たんつて彼女いるの？」

「はあ…? いきなりだなお前…。まあいいけどね」

「そっか。……なら私も」

「ん? どうしたんだ?」

「あ、あのね! 宗たんに聞いてほしいことがあるんだけど…。」

「お、おう。できればもう少し落ち着いてくれ」

俺は七海のテンションを落ち着かせると、話はなにかと聞いてみた。すると七海は頬を少し赤く染めて話をはじめた。

「あの…ね? 宗たんつて彼女はいないんだよね? それじゃ気になつてる人とかは…?」

「あー、いないな。考えれば考えるほどに俺つて青春してねえな」

「ふう… よかつたあ…」

「よかつたつて……。俺は全然よくねえんだが」

七海は俺の話は聞いてなかつたよつで、ずっと深呼吸をしてゐた。
そして意を決したような「よし！」を言つた後、俺の方を見た。

「あ、あの…。私は宗たんに入学式の時から一目惚れしててね、ずっと伝えるタイミングを見失つてたんだけど…。よ、よかつたら私を宗たんの彼女にしてくれませんか！」

俺は普通に驚いた。

七海のことは嫌いじゃないし、むしろ好きだが俺は七海とは『仲のいい女友達』だと思つ

も『仲のいいクラスメート』と思われていると思つてた。

たが、いわゆる「アーティスト」と通常の「儀」には七海が可憐な

いたんだろう。

た。

「うー、…、やっぱヤダよね…。こんな我慢な子に「ち、違ひーー。」

俺も無意識に七海に惹かれていたんだと思う。だから……俺で

卷之三

そして七海がわかつと離さないよつて俺に抱きついた。

「うう……、嬉しそよお……。ひぐつ……えぐつ……」

「ええ！？ なんで泣いてるんだー…と、とつあえず泣き止め。な？」

「だつて嬉しいんだもん…！ それは今日の約束とかじゃなくて本心だよね？」

「当たり前だ…さすがに冗談で付き合つたりはしないー。」

「じゃあ私も抱きしめて？ 宗たんばつかりズルいもん」

俺は七海にそつと抱かれてゆづくつと七海の背中に手をまわしました。そして強すぎないよ、でも離せないよと抱きしめた。

「はふう…、宗たんテクニシャンだね」

「言ことひては危なじ發言はやめ」

「ん？ 宗たんに考えたの？ 私は別に深い意味はないよ？」

「なんでもない。それよつて離れるんだ？」

「もうちょっと…。いや、あと一時間「お疲れ様でした…」、お邪魔しましたー」「ひやわつーー。」

七海が和んでもだ抱きつづきおつじたときに観覧車の扉が開いた。

観覧車が一周回つたから従業員は空けたんだろう。… すげえ氣まずそうにしてたけど。

俺たちは急いで降りて、閉園直前だったのでこの遊園地から外に出た。

「はあ……、恥ずかしかつたあ……」

「まあ体勢的に俺が襲われてる感じだったしな。まあ気にするなつて」

「で、でもお……。恥ずかしいのに変わりないよ……」

「それなら俺は観覧車での七海の行動の方が恥ずかしいと思つぞっ」

「い、言つな～！せつかく忘れてたのにい～！」

「ま、可愛かつたししいじやん。さて、帰るか」

「う、うん。…………宗たんが可愛いって言つてくれた！？」

駅まで歩いてくると七海はかなり驚いた声を上げた。
そして俺の腕をグイッと引いて俺の歩みを止めた。
てか引かれた左腕が痛い……。

「ねえーさつきの本当ー？今までなら言つてくれなかつたのにーー！」

「本当だつて。まあなぜか言つたくなつたんだよ」

「ふむ……これが恋人効果……。な、なら私のことも名前で呼んでー！」

「じゃあ真央。そろそろ帰らないと門限破りで怒られるんじやないか？」

「ああーーー、そうだつた、早く早くーーー！」

「引っ張るな……って、言つても聞かないな……」

「うして俺の日曜日は過ぎていった。

まさか真央からの告白は想定外だったが、結果として付き合えてよかつた。

俺もどこか内心では惹かれていたんだ。今思えばなぜ氣づかなかつたんだと思う。

さて、帰つてからは晩飯のことをじつ言い訳するかな……。

第十二話・修羅場の約束（後書き）

プロジェクトを全部書き直したんですがどうでしょうか？

とりあえず書き溜めた分は投稿しようかなと思つて投稿しました。
……まあ心なしあたな展開っぽいですが。

そしてこれからは修羅場編に突入！ご期待ください！

MTさん。感想ありがとうございました！！

いただいた応援のおかげでかなり書く気が出ました。

これからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十四話・テートのやの後（前書き）

少しの間放置していくすいませんでした。
放置していた理由はただ書きたくない衝動に駆られたなんですね。
ふざけた理由で放置していくすいませんでした。

第十四話・デートの後の後

俺は言い訳を考えつく前に家に着いてしまった。
それで、どう言い訳したものか…。

「ただいま」

「おかえり。随分と遅い帰宅だな」

「げ…、葵ねえ…」

「こう言つてはなんだが、今は一番会いたくなかった。
だつて言い訳はすぐにバレるし」

「私は今日も仕事でいなかつたが、私が帰つてきてもいよいのはおかしいと想つぞ?」

「今日は友達と遊んでたんだ。つい長引いちゃつたけど…」

「どうか、なら私からは別に言つこともない」

「わう?…じゃあすぐにして飯作るから待つててね

「そう…って俺は逃げるようリビングに向かつた。

そしてリビングの扉を開けた瞬間、俺にタックルが飛んできた。
後ろに倒れることはなかつたが少し吐きそうになつた…。

「遅いよ…すけ!…お母さんを餓死させる気だつたの…?」

「うう……、そんな気はないよ……。それより離れてくれない?」

「うん、分かったあ。……ねえそーすけ?」

「ん? ビーハしたの?」飯なら今から作るナビ……」

「ううん、違うよ。なんでそーすけから女の子のこおにがするの?」
この人の嗅覚は犬並みじやないのか?

確かに真央とは接触したが、真央もそんなにキツい香水を使つたり
はしていなはづだ。
なのに嗅ぎ分けるとは……。

「や、やあ……? 僕はそんなに女人に接触はしてないし……」

「嘘はダメだよ宗佑。ちゃんとお母さんに話しなさい」

ヤバい。本格的に説教モードじやないか。

しかもリビングの扉の前だからテレビを見てる美咲ねえにちらちら
と見られてるし。

とりあえずこの場には美咲ねえしかいなくて助かつたな。

「い、いや……。実は遊んだ中に女のもいたんだよ。そのとおりに
触れたんじやないかな?」

「お母さんは嘘は嫌いだよ。ちゃんと本当のことを言こなさー」

「う、うう……。なんと言つたらいいのか……」

「のまま俺は真央と付き合つたからと言えばすぐに済むだろ?」

だがそれを言った瞬間、俺に不幸が降りかかる気がする。
さて、本当にマジでどうしたものか……。

「あ、あのですね……。なんと言いますか……」

「ん? もう話してくれるよ! なった?」

「えーと、実は今日は女の子と遊びに行きました……」

「「はあー?」」

「ひーっ!」

俺が今日のことを少し話すと母さんだけでなく美咲ねえまで反応した。
それはいいんだが、まさか「はあー?」と言われるとは思わなかつた……。

俺、そんなに大声で言つてないのにな……。

「へ、へえ……。それで続きを聞かせて?」

「宗佑お前……なんか変なことがあつたならシバく……」

母さんは動搖するだけで終わつたが美咲ねえは俺に確実に危害が加わるな……。

さて……、どう切り抜ければいいんだろうか?

「えーと、まあ遊びに行つただけです。それだけです」

「ほ、本当にー? それだけなのー?」

「う、うん。それだけだよ？」

「なんで疑問形なんだ！！絶対キスでもしたんだろう！！バレバレだ
「..！」

「なぜバレ..てないな！！うん..じゃ、俺は部屋に戻るから晩飯
は出前を取つて！！」

俺は走つて部屋に戻り、扉のカギをかけた。

そして寝る用意に着替えてベッドですぐに眠りについた。

扉の向こうから「出て来い！！ボコボコにしてやるーー」と聞こえたのは冗談ではないだろう。

第十四話・テートのやの後（後書き）

久々に書いてみるとグダグダ感満載ですね…。

次回は豊田の話。つまりは戦線離脱後の朝と学校の話になるのかな?

きゅーのきゅーちゃんさん。感想ありがとうございました。

話の長さは四分でも四倍が無かつたので、ちょいどこいのなら安心しました。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

ご意見、ご感想は隨時受け付けておつます。遠慮なくどうぞ。

第十五話・波乱の幕開け（前書き）

今回から本格的に修羅場編に突入です。
はたして私の文才で修羅場をうまく書けるのだろうか…。

第十五話・波乱の幕開け

俺は普段ならもう起きている時間に田が覚めた。

結局昨日は美咲ねえの怒号のせいで眠れたのは夜もかなり更けてきた時間だった。

そのせいで起きるのが遅くなつたんだと思つ。

「ふあ……まだ眠いけど朝飯と弁当作らないとな……」

俺は素早く制服に着替えてからリビングに向かつた。

遅くなつたとは言いつつも普通の高校生には早すぎる時間だ。

俺はちやつちやと朝飯と弁当を作つた後、机に座つて昨日の言い訳を考えだした。

「やつぱぱ言い訳が難しいみなあ……ああ……逃げなきやよかつた……」

「なにが逃げなきやよかつただつて?なあ宗佑?」

「…………オ、オハヨウゴザイマス」

「おはよ。それでだ、昨日はなんで逃げたんだ?ん?」

ヤバい……今回ガッシリ肩をつかまれた……。

わで、どうせいつて言えば何事も無く終わるだろつか……。

「えつと、その、なんと云つかですね。かくかくしかじかです」

「とつやつーーー。」

「いだあー? なんでグーパンチなのー?」

「ビンタならまだよかつたのに…。
まさか誤魔化したらグーが飛んでくるとは…。」

「真面目に答えるー! アタシは… 心配なんだ…!」

「心配? なんで昨日のことを見抜ねえが心配するの?」

「せりやあ… アタシは… 福佑が」

「ん?俺が?」

「えつー? そ、そりや…、今は関係ないー! 早く話せー!」

さすがの俺でもグーを準備されたら脅されてるよつこしか見えない
よ。

しかも顔が真っ赤になつてゐから下手なことを言つたらブン殴られそ
うだ…。

……もひ、本当のことを言つて楽にならうかな…? ？」

「えつと…、これから話すこと言つたり殴らないでね?」

「その言つたことによる。殴らないかもしけないし殴るかもしけな
いな」

「じゃあどうあえず逃げないから俺の正面のイスに座つてくれる?」

「…? ああ、分かった」

「うしてなにか分からず」に美咲ねえは俺の正面のイスに座った。
さて、これで間合いは十分だから対処できるかな…。

「美咲ねえはさ。もし俺が告白されたらどうする?」

「え…。そ、そりや…祝福してやるよ…!…うん」

「よ、よかつたあ…!…

もしシバくなんて言われたら逃げてた…。
よし。これで安心できたし、正直に言つか…!…

「実は昨日真央と一緒に遊園地に行つたんだ。あ、真央って言いつの
はこの前教室で紹介した子ね」

「ああ、あの能天氣そうな女か。アイツと一緒に行つたのか?」

「うん。それで最後に観覧車で真央に告白されたんだ」

「え…?」

その瞬間に美咲ねえの顔が驚きで固まった。

そして声が震えながら美咲ねえが俺にたずねてきた。

「へ、へえ…、それで、どうしたんだ?」

「あ、うん。俺はそれを受けたよ。まだ実感はないんだけどね…」

「え…?そ、そなのか…。へえ…よかつた、な」

「うん。実感は沸かないけど大切にするつもりだよ」

俺がそう言つと美咲ねえは下を向いて黙つてしまつた。
美咲ねえが「こんなことになるのは初めてなので俺はびっくりしてい
る。

「み、美咲ねえ？どうしたの？」

「今日は学校休む。だからまつといてくれ」

「え？ ちよ、待つて……」

俺の言葉も聞かず美咲ねえは部屋に行つてしまつた。
その後はみんなを起こしてから、俺は学校に行つた。
母さんが終始睨んでいたのはかなり怖かつた。

俺は学校に着いて、教室に向かっていると背中に誰かが抱きついて
きた。

いきなりだったので前に倒れそつだつたがギリギリ耐えた。

「やつほーーぐつもーにん宗たんーー元氣がないよーーー！」

「お前の元氣に比べたら低いだろ？ よ」

「ぶーー。真央つて呼んでよおー」

「はいはい。真央は元氣すぎるんだよ、そろそろ疲れてきたから離

れてくれ

そう言つと素直に離れて俺の横に並んだ。

改めて周囲を見ると驚きの目と恨みの目とのどれかで見られていた。
真央はそんなことほ【気にしない】と言わんばかりに話してくれる。

「そつけないなあ……。はつーまたか倦怠期と言つのはこれかー!?

「早すぎただらうが。俺はただ朝だからテンションが上がらないんだ

「なんだあ、よかつたよかつた。ちなみに私に倦怠期は訪れないよー!ー!ー!

「遠まわしな言い方だな。……まあ、ありがとな

俺は少し照れつつ真央の頭を撫でた。

すると猫のように田を細めて撫でられるがままになつっていた。
さすがにこのままでは遅れるので撫でるのをやめた。

「ぶーーぶーー撫で時間が短いぞーー!ー!

「学校の中なのに遅刻してもいいならーーが、どうする?ー?

「なんどーーひ、早く行こー!ー!ー!

「はいはー。分かりましたよ

学校内にいながら遅刻は誰だつていやだらう。
俺たちは遅刻することなく教室にたどり着いた。

まあ真央がずっと撫でるといつもやかたのは眞つまでもないだろ。

第十五話・波乱の幕開け（後書き）

なんだか今回は美咲が可哀想な回ですね。
そして短い回でもあります。しかも終わり方が不自然だし…。
次回は帰つてからの出来事みたいな感じかな？

疾風迅雷さん、やまだんさん。感想ありがとうございました。
まさか感想が一人ではなく二人だとは思わなかつたので見たときは
びっくりしました。

これからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ

第十六話・波乱は沈静する…のか？（前書き）

最近はアイデアが全然出でこない…。

これはスランプでないと想いたいなあ…。

第十六話・波乱は沈静する…のか？

突然だが俺は今とても大変なことになつていてる。

俺が学校から帰つて玄関の扉を開けるところまでは大丈夫だつた。だが玄関を開けた瞬間、俺の体は宙を舞い、廊下のフローリングに叩きつけられた。

この家でこんなことができるのは一人しかいない…。

「…いつてえ…。なにするのを葵ねえ…？」

「理由は宗佑が一番知つてているはずだ。試しに言つてみてくれ」

「ヒントもなしじゃ無理だよ…」

「…やつか。ならヒントをやつ。なぜ美咲が部屋で閉じこもつている…。」

美咲ねえは朝からずっと閉じこもつてたの！？

さすがに昼には出でくると思つてたのに…。

美咲ねえが閉じこもつた理由…。俺が告白されたことを言つたから

…？

「もしかしたら…。俺が真央と付き合つていることを話したから？」

「ほう…。そんなことがあつたのか。美咲は宗佑以外と口を利かないと言い張つていてな」

「なつ…。もしかして俺は嵌められたの？」

「そういう言い方もできるな。とりあえず詳しく話してくれ。そういうこともできない」

俺は倒された体を起こし、葵ねえに朝の出来事を話した。弁護士の仕事の癖のためか時折状況を整理するように問いかけてきた。

俺はそれにも嘘偽り無く答え、全てを話し終わった。

「なるほどな。それで美咲は極度のショックで閉じこもったのか」

「うふ。……やっぱり俺のせいになるのかな？」

「話を聞く限りでは宗佑が加害者で、美咲は被害者だらうな。まあそうとも言こない部分もあるが」

「でもやっぱり俺のせいだよね……よし、俺は美咲ねえに謝つてくれるよ……」

「それが賢明だらうな。では謝つて解決したら夕食を作ってくれ」

「うふ。とりあえず終わったら、ね？」

「ああ。じとがややこしくなる前に行け」

俺は葵ねえに背中を押されて階段を駆け上がった。

そして美咲ねえの部屋の前に行き、扉を二回ノックした。

「……美咲ねえ？入つて」「来るな……あっち行けバカ……頼む

よ」

「イヤだったらイヤだ……入ってくんない……」

扉の向こうから聞こえてくる声はいつもよりも弱弱しかった。それにずっと泣いていたのか、時折鼻をする音や泣き声が漏れてきている。

「じゃあ入らない。でもここからなら話を聞いてくれる?」

「……分かった。そこなら……別にいい」

「ありがと。じゃあいきなりだけごめんなさい……」

俺は扉の前で思いつきり頭を下げた。

少し頭を打つたがこの際関係なんてない。とにかく謝るんだ。

「俺は普通に話していたつもりだったんだけど、いつのまにか美咲ねえを傷つけていたみたいで……とにかくごめんなさい……」

「え……? なんで謝ってるんだよ……。アタシが勝手に落ち込んだだけじゃねえか……」

「その勝手に落ち込む前には絶対キッカケがあったと思うんだ。多分それは俺のせいだし……」

俺がそういうと美咲ねえの部屋が少し開いた。そこから毛布で体を覆つた美咲ねえが顔をのぞかせた。目は赤く充血して涙の後が顔には残っていた。

「……入つてこよ。宗佑なら別にいい」

「ん、ありがとね」

俺は承認も得たので部屋に足を踏み入れた。

するとベッドの周りにあつたものは投げられたのだろう。辺りに散乱している。

ガラス類は投げられてなかつたので足を切つたりはしなそつだ。
俺はベッドに座るよつて言われたのでベッドに座り、美咲ねえは隣に座つた。

「なあ……、宗佑は今の彼女といつて楽しげ?」

「うん。楽しいか楽しくないかでこいつと楽しげ?」

「そつか……。アタシとまじうだ?……やつぱ楽しくないよな

そつ言つて美咲ねえはどんよつとしたオーラを纏つて落ち込んだ。
まつたく……。楽しくなきゃ家族なんてやってなこよ。

「楽しいに決まつてるよ。ていつか楽しくなかつたらもう家を出で
るよ」

「ふえ……そ、そつなのか?」

「当たり前じやないか。俺はいても楽しくない人に飯を作つたりは
しないよ」

「う、うう……。よかつたあ……よかつたよお……」

俺はぴつたりと抱きつこゝ泣きじやぐる美咲ねえの背中をたすりな
がら宥めた。

普段とは違つて弱氣で俺に甘えてくる美咲ねえは姉とこより妹に見えた。

美咲ねえを宥めて数分。やつと落ち着いたよつで俺から離れた。

「よし……」んことでクヨクヨしてられないな……まだ奪い返せるんだ……

「……なにか取られたの？」

「鈍感な宗佑は関係ない！」といつかお前だ……アタシはシャワー浴びてくる……」

「んえ！？鈍感な俺が取られたから奪い返すのは俺……どうこうとだ！？」

俺は残された言葉にかなり困惑していたが、あまり気にしないことにして部屋を出た。

そして俺はリビングの扉を開けてリビングに入つた。すると踏み出した足に二つの物体が突撃してきた。

「いっでえ！？な、なんだあ！？」

「ヒヂーヒョウヒーすけ……一日間も晩ご飯を作ってくれないなんて！」

「セーちゃん……今日は絶対に晩ご飯作つてもうつかりね……」

「作るから離せつて……いだだだ！母さんもスネに頭を押し付けないでくれ……」

「「じゃあ晩ご飯作つて……」「

「作るから……作るから離してくれ……」

そう言つと食欲で生きていると言つても過言ではない一人は足を開放した。

それにも痛かった。まさか体じゃなくて人体の急所であるスネを狙うとは……。

「さて……、そろそろ作り出すか……」

「あ、兄さん。私も手伝います」

「お、助かる。ありがとうございます」

「お礼を言われるようなことじゃありません。……それに、彼女さんのことをじっくり聞かせてくださいね」

凛は全て知っていたのか！？

まさか葵ねえのようすに部屋で話ではなく、料理中に聞くとは……。俺は若干戸惑いながらキッチンで食材を調理し始めた。

「で、兄さんはいつの間に彼女さんと付き合つだしたんですね？」

「……なんで凛が知つてるんだ？」

「そりゃあ通学路や帰り道で女性に抱きつかれていましたし。さすがに友人の域は超えていると思つただけです」

だから俺と真央が付き合つていることがバレたのか。

確かに通学路も俺の高校と途中まで一緒に、帰り道も生徒会で遅くなれば高校と同じになるか…。

「話を戻しましょうか。いつ、彼女さんができたんですか?」

「1Jの前の日曜日に俺は出かけてただろ?そのときにな

「…………チツ、やつぱり後をつけていれば

「ん?なんか言つたか?」

「いえ、別になにもありませんよ。…………まあ料理のときは私が独占できるからいいですね」

なんか凛がブツブツと呴いていて怖い…。

俺は落ち着かない今まで料理を作り、完成したのでリビングのテーブルまで持つていった。

そのときの母さんと夕菜の喜びようつたりすこかつたな。
こうして葵ねえと美咲ねえを呼んできて、久々に家族全員で夕食を食べた。

第十六話・波乱は沈静する…のか？（後書き）

初めて葵に弁護士としてこれをやりした気がする。
そして美咲は無事回復。そして新しく凛が黒くなっちゃった…。
次回からは凛がキーキャラになるのかな？

雷神さん。タクティスさん。感想ありがとうございました。
これからも読んでいただければ嬉しいです。

「」意見、「」感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十七話・静かな対抗心（前書き）

最近は学業の方が忙しくて書けませんでした…。
まあ私も三年なので「こんな」とあるなと言われそいつですが…。

第十七話・静かな対抗心

あの三咲ねえの事件から数日が経ち、何事もなく毎日は過ぎていった。

まああんなに色々起るものが日常って言つのも考え方だけど。

そんなこんなでもう五月にも入ってきて梅雨が近くなってきたので、地味に暑くなってきた。

俺はそんな地味に暑い中、教室という擬似サウナで授業を受けていた。

「であるからして……。蒸し暑い……なぜこんなに蒸し暑いんだ！」

「！」

「梅雨が近づいとるからに決まつとるやん」

勇敢にもイライラして「る遠藤先生にツツ「んだのは関西出身の宇野大輔だ。

クラスの中ではムードメーカーを務めている少しバカな男子だ。髪は染めて金髪でワックスでウルフヘアにしてる。そして高身長。

怖いもの知らずなのかバカなのかは知らないが、イラついている遠藤先生にもツツ「お奴だ。

「なあ宗やん？さつき変な」と思わんかった？」

「知らん。それと宗やんはなんだ？初耳だぞ」

「いやあ宗やんの愛しの彼女の呼び方が宗たんなら宗やんでもええかな～ってな」

「…まあいいか。勝手にしてる」

「言われんでもするで」

「俺の授業中に私語たあい度胸だな…。ええ？」

俺と宇野が教壇に体を向けるとそこには鬼が経っていた。
元々身長が高くて筋肉もある人なので、怒りで鬼に見えてしまった。

「俺は関係ないですよ。先に話をしだしたのは宇野のバカです」

「それはヒドい『宗やん…?』しかもバカつて足さんでええやん…!」

「なら四角形の面積の公式は?」

「そんぐらじ分かるで。四角形は縦×横÷2やん?」

「残念。四角形は2で割らなきや正解だ」

「……みんなそんな田で見んといじ」

おそらくクラスの皆が宇野のことを見てたんだらう。
しかもこの高校は簡単ではないはずなんだが…。

「なり宇野のバカはあとで職員室に来い。なんか色々心配になつて
きた」

「バカをつけて呼ぶんやめてえな…」

「まあ眞実は変わらん。受け止めや」

「…もしかして宗やんは僕のこと嫌いなん?」

「嫌いではない。むしろ好きだぞ?」

俺がそう言つた瞬間、クラスの女子の数名から黄色い声が上がつた。
そして真央と思わしき声で「ライバルが男の子!?なんだか色々複雑だよ!?」と聞こえた。

…もしかして俺が告白したノリになつてゐるのか?失礼な。

「もちろん友人としてだ。俺に男色の趣味はカケラもねえ」

「え~、僕は別にええの?冗談やつて…だからそんな「!!」を見るような目で見んといて…!」

「まあいいか。で、先生はいつ授業を再開するんですか?」

「再開したが暑いからやる気が起きん。だから後は自由にしてる」

こうして遠藤先生の授業は皿體にて変わつたので各皿が自由にしてる
た。

さて、俺はなにをしたものか…。寝るか。
俺は腕を枕にして寝る準備をして…、

「宗たん!」

「いだあつー?」

鼻を強打した。すげえ痛い…。

おそらく真央が俺を呼びにきたついでに背中を押したんだろ？
そのせいで自分の腕に鼻を勢いよくぶつけてしまつた。

「いつてえ…、こきなりなんだ真央？」

「ん？ そつそつ…『おたんは宇野君と私のどっちが好きなの…？』

「真央に決まつてゐるだろ？ が、俺に男色の趣味はないと言つたのを
聞いてなかつたのか？」

「…聞いてなかつた。そんなこと言つてたつけ？」

「言つた。まあこいつして確認できたならいい」

「そだね～。やつ言えば付き合ひだして時間も経つたねえ…」

「まだ五月だろ？ そんなに経つてないだろ」

「経つたの…！ 私は『お飯とお風呂のとき以外は考へてるんだよ…』

「それは考へておきやないか？ ……ん？ どうなんだ？」

それからは自習を真央と話ながら時間を潰した。

そして次の授業からは遠藤先生の様には行かず、普通に授業になつた。

そこからは淡々と授業を受けて、真央と一緒に帰宅しだした。

俺と真央は一緒に並んで帰宅していた。
夏も近づいてきたからか、まだ空は明るい。

「はあ……最近は蒸し暑いな……」

「だねえ～。最近は雨も多くなつてきたし」

「洗濯物が濡れないよつこしないとな」

「そんなこと気にする高校生は宗たんぐらうじやない?」

「まあそつかもな」

俺たちが他愛もない話をしていると、前方に見知った人影が見えた。
短めのポーテールを揺らしながら歩いているのは凛だらう。

「生徒会で遅くなつたのか?」

「どうしたの? 宗たんつて生徒会に入つてたつけ?」

「いや、前に歩いてるのは妹だつたからな。この時間に帰宅して
つてことは生徒会だらうと思つてな」

「宗たんの妹! なら会つに行つよーー!」

「え、ちゅ、引っ張るなつて!」

俺は真央に引っ張られて凛の方まで連れて行かれた。
凛はいきなり人が前に現れて驚いていたが、俺の姿を見ると納得し

たよつた表情をした。

「こきなり前に現れないでください。びっくりするじゃないですか」

「おお～、宗たんに似てクールだね！ 可愛い～」

「ちよ、こきなり撫で回れないでください～…」

「おい真央、凛が困つてゐるから離してやつてくれ」

「はーい」

俺が声をかけると凛を撫で回すのをやめて俺の横まで来た。凛は真央のテンションについていけずに困つているよつた感じだ。

「～めんな凛。真央はこいついう奴なんだ」

「大体分かりました…。で、何か用ですか？」

「なにも用はないよ？ ただ凛ちゃんが見たかっただけ」

「そうですか。なら私はこれで

そう言つて凛は俺の横を通りて家に帰つていつた。

う～ん。なんであんなに機嫌が悪かつたんだ？

「…嫌われちゃつたのかな？」

「いや、凛は静かなタイプだからな。ちょっとびっくりしたんだろ」

「やつかな？なんだか静かな殺気が感じ取れたんだけビ…」

「お前がだいじの殺し屋だ。そんなわけないだろ？が」

「むう…、まあいいや。じゃあ私はひつちだかー…」

「ねい。じゅあ明日に学校でな」

「つよーかい。じゅーこーー！」

「ひつて俺は真央と別れて家に向かって歩いた。

にしても凛から殺氣か…、勘違いだらうな。

俺は気にしないようにして、今夜の晩飯のことを考えて歩いた。

第十七話・静かな対抗心（後書き）

この小説には男の友人が少なかつたので新キャラを出しました。
そして今回はやや日常編になりました。…修羅場を期待してた方は
スマセン。

次回からはよりよつとじずつ修羅場っぽくするつもりです。

それと一応追記ですが、私は男なのでBLに興味はありません。勘
違いはなさらぬようにお願いします。

「」意見、「」感想は隨時受け付けております。遠慮なくビリbg。

第十八話：一言で始まる～前編～（前書き）

今回はまたまた前後編に分けちゃいましたが、自分の中では修羅場っぽくしたつもりです。

もしかして違うかもしだれませんが、そればかりは私の文才を呪つてください。..

第十八話：一言で始まる～前編～

俺は真央と別れてから家に帰つて晩飯を作り出した。
もちろん凛も手伝ってくれているが、見て分かるほど不機嫌オーラ
を出している。

……もしかして、真央のやつたことを怒つてるのか？

「あの～、凛さん？」

「はい？なんですか？」

「なんでそんなに不機嫌オーラを出しているのでしょうか…？」

「さあ？自分で考えてみたらいつです？」

「うう…不機嫌と認めてるだけ余計に怖い…。
やつぱりあることか？真央の撫で回しが原因なのか…？」

「考えてばかりでなく料理に手を回してください」

「お、おひ。了解しました…」

俺は注意されたので料理を再開した。

最近は凛もクールになつてきてさみしいなあ…。

俺はさみしいと思いつつ晩飯を作り終わり、リビングまで運んだ。
そしてリビングにいなかつた人を呼んで晩飯を食べだした。

「相変わらずそーすけの～飯はおいしいねえ～」

「最近は凛も手伝ってくれてるから凛もお礼を言つてね」

「アーナの？凛ちゃんもありがとー」

「別に…お礼を言われる」と…

「むー、凛ちゃんがテレてるなんて珍しい…。」

「夕菜つむぎわよ」

なんだか最近は平和に食事ができていな…。
一時期は色々とあって、ゴチャゴチャしてたからなあ…。

「ん？ビリした宗佑？田なんかつぶつて…。」

「こやー、一時期は色々いじめやしちゃしたなあって思つてね」

「そうだな。…………宗佑が恋人を作つたせいだ

「あ、葵ねえ？なんでいきなり箸を握り締めてるんですか…？」

「お？…。なんでもない」

絶対なにもないわけないよね！？
まさか俺に関係してるのかなあ…？

「安心しろ宗佑。アタシは宗佑を守つてやる。」

「み、美咲ねえ…！」

「その代わり代価として一皿の皿田をもひつー。」

「リスクが高すぎないーー？」

「するーーーじゃあ私もするーーー。」

「夕菜もーーーっていつかまだ決まってないからなーーー。」

「えー。残念だなあーーー。」

なんだか最近は美咲ねえが優しい代わりにおかしくなつてゐるよーーー。
まさか俺の自由を一日要求されるなんてーーー。
しかも飯に夢中だった夕菜も反応するなんてーーー、おやひしこシーペ
アだーーー。

「むぐむぐーーー、『ひくん。お母さんが食べてる間になにがあつたの
？』

「い、いやーーー。えつと…最近の社会情勢と政治のあり方について話
してたんだ」

俺はもしかしたらバカかもしれない。
こんな騙し方なら母さんでもさすがにーーー、

「お母さんむずかしいのキライーーー。」

さすが母さん。期待を裏切らないな。

まあ母さん以外は騙せてないので「なに言つてるんだ?」といつ顔
をされている。

……でも凛だけは黙々と飯を食べ続けている。

そして凛は俺が見ていることに気づくと、箸を置いてひざを向いた。

「そういえば彼女さんは仲がいいですね。通学路で抱きつかれますし」

その瞬間、場の空気がピタッと止まった。

その中で凛だけが箸を持ち直して飯を食べるのを再開した。だが凛以外の四人はそれぞれが色々な顔をしている。
さて…、今回はどんなことを起こすつもりなんだ神様…。

第十八話：一言で始まる～前編～（後書き）

今回は短くてスイマセン……。

なんせ私は来年受験なので隙を見て投稿しているものでして……。
とりあえず勉強もしなくてはならないので更新スピードは若干落ち
るかもしれませんが、隙を見て投稿するつもりです。

BRISHINGRさん。MTさん。ご感想ありがとうございます。
そして小説中毒さん。ご指摘ありがとうございます。
ご指摘のあつた葵の弁護士の年齢については修正いたしました。
これからも読んでいただければ幸いです。

ご感想、ご指摘は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十九話：一言で始まる～後編～（前書き）

久しぶりに投稿！！

まあGWなので時間は微妙にあつたんですけど、構想が固まらなかつたのでできなかつた…。

まあなんやかんやで投稿です。

第十九話：一言で始まる（後編）

凛以外の箸が完全に止まってから数秒、この空間が止まつた気がした。

そして一番最初に動いたのは意外にも夕菜だった。

……まあ不機嫌なオーラを出しながら飯にがつついているだけなんだが。

「お、おい。そんなに慌てたら『箸』に入るぞ……」

「そんなの関係ないよ……」

「…………触りぬ神に祟りなしだな」

夕菜はとりあえず放置しておくとして、問題は他の三人だ……。他の人が見たら何事もなさそうだが俺は分かる。すげえ不機嫌だ……。

俺が心の中で戸惑つていると、母さんがチヨイチヨイと腕をつづいてきた。

「ねえセーすけ？さつきの話ホント？」

「え……？ま、まあ……たまにそういうことも……」

「へえ～……、ていつ……」

「つむつむ～……なんで頭を叩いたの～？」

「し～らない。そーすけはずつと考えればいいんだよ

え、なにこれ？

なんで肉親から微妙なイジメを受けてるんだー？
まあ俺のせいなのは絶対なんだろうけど…。

「やつぱり原因は登校中の出来事だよな…」

「だよなあ…じゃねえ！付も合つのは許すとこも抱も合つのは許さねえ…！」

「美咲ねえの基準が分からなによ…」

「うつせえーとにかく許さないからなーー！」

「話せないって…、じゃ あなこすればいいのむ」

「え？え、えーと… 考えてない…」

「じゃあ考えてから言つてよ…」

なんだか美咲ねえは最近考えることを忘れてる気がすね…。
いや、忘れてるところか…、少しボケてる？
ところが良い表現が見つからないな…。

「あ、思いついた！宗佑の自由を「それは私に許さん」口出しそん
なよ葵…！」

「お前は宗佑の自由を奪つてどうするんだ」

「色々ある

「……お前はもつと勉強した方がいいんじゃないか？」

「なにい！？確かにアタシはこの家じゃバカかもしけないが、学校じゃまあまあだぞ！！」

「前回のテストで補習になつたのはどこの誰だ？」

「アタシじゃない！アタシは赤点ギリギリで補習は夕菜だ！？」

「ちよー私の」とまで巻き込まないでよー！…」

夕菜……補習だつたんだな……。

確かに前回のテスト勉強は俺と葵ねえに教えてもらつてたような……。

「ほう……、それはそれで詳しく聞きたいが今はいい。で、テスト勉強はしたんだろうな？」

「…………してない。で、でもテストなんか将来必要ないしいじやねえか……」

「テストは必要なくともどの学校を出るかは将来必要になる」

「くう……り、理屈ばつか並べてんじやねえ！…」

「知るか。私は普通に正しこ」とを言つたはずだしな

まったくその通りだな。

それより美咲ねえって成績悪かつたんだなあ……。

てつくり部屋にいるときにもかしてたから勉強してたと思つ

てたけど。

じゃあ美咲ねえは机でなにやつてたんだ?

「ねえ。美咲ねえは机でなにやつてたの?」

「ん? そりや学校の宿題に決まってるだろ。机でするなんてそれぐらいしかないだろ?」

「へえ、でも宿題は返つてきたら残念な結果だつたと...」

「う、うるせー! お前らは父さんに似たから頭がいいんだー! アタシたちは母さんに似たから頭が悪いんだよー!」

「ひ、ひどー! お母さんの方が頭いいもん! あの人は...バカじや、なわけです」

「ほり見ろー! アタシたちの思考回路は母さん寄りで、お前らは父さん寄りなんだよ!」

「ん? 遺伝ってそこまで似るものだつたつけ?」

「どうだつたかな? 専門分野ではないからよく分からんな

むむむ...、葵ねえでも分からないなら俺は分からないな。
まあ葵ねえは弁護士だし、母さんはデザイナーだし、父さんは自営業だし。

そういうや最近は父さんから電話が掛かってこないな...。ビリしたんだろ。
まあいい。後で掛けてやるか。

「宗佑? 何をぼんやりとしているんだ?」

「ん? いや、なんでもないよ。久しづつ父ちゃんを思って出したなあ
つて」

「ダメえ～！あの人は私たちの汚点なの！忘れなさい！」

「ひどい言われようですね。元とは言え旦那だった人に」

「凛りやんもダメっ！…」

「そう言えばなんで離婚したの？私は一番下の子だからよく知らないんだけど…」

「どうか。凛は赤ん坊で夕菜はまだ母さんのお腹の中か。俺もそんなにはつきりは覚えてないなあ…。どうだつたんだつけ?」

「うう～…、みんななんであの人の話ばっかり～～！もうイヤダ～～！」

そう言つて残りを一気に食べて母さんは部屋に帰つた。

「どうしたの？」

「いや、なぜ母さんと父さんが離婚したかを思い出してな」

「え！？ ホント葵お姉ちゃん！？ 教えて教えて～」

「そりゃ。凜や夕菜は数回しか会つたこと無かつたか」

「うん。だから教えて~」

「それは私も聞きたいです」

凜と夕菜の要望もあり、葵ねえは話を始めた。

「あれは冬頃の夜だったかな？私たちが家で晩御飯を食べているときに父さんが帰ってきたんだ。そのときに父さんはかなり泥酔していてな、そのときに離婚のキッカケを作つたんだ」

「キッカケ？それで決まつたんじやないんだ」

「ああ。そのときに父さんは母さんに向かつて言つた言葉が、「ただいまー！今帰つたよおめぐみちやあーん」だつたんだ。それに憤怒した母さんは般若の「」とく父さんを殴つたな」

「なるほど。そりゃあ怒られても仕方ない」

「だがこれはキッカケだ。この後も父さんは同じような呼び間違いをした。だから離婚したんだ」

「なるほど…。それは全面的に父さんが悪いなあ…」

俺はうろ覚えだつたから聞いてよかつたな。

離婚話はまあ笑えないが、少しは気になる話題だからよかつた。

こうしてなんだか笑えない話を聞きつつ俺たちは晩飯を終えた。

その後俺は洗い物をした後に部屋に戻つて父さんに電話を掛けてみ

た。

「もしもししちゃ元氣にしてる?」

『その西…宗佑か…?なんでお前まで着信拒否していたんだ…?』

「着信拒否…俺はそんなことしてないけど…」

『嘘だ…!…俺が久しぶりに掛けたら拒否されたもの…?』

「ホントに?後で見てみるよ」

『マジでやうしてくれ。そのままじゃ俺は孤独に打ちひしがれて死んでしまう…』

「ウサギみたいなことを…」

『んで、久しぶりに電話なんてどうしたんだ?もしかして母さんとの再婚に手を貸してくれるのか?』

「今日は久しぶりに晩飯のとき「父さんが会話をに出たからね。久しぶりに電話したんだ」

『マジでか…?で、俺のことなんて言つてた…?』

「母さんはイヤだつて言つて離脱。そして話は離婚話になつただけだよ」

『「う…、なんで娘たちは古傷を抉るんだ…』

「まあ情けないってなつただけで終了したよ」

『「うう…父さんばブローカンハートだよ…。今日はもう寝るね…』

…』

「分かった。じゃあね」

そう言って向こうから電話は切れた。

俺は携帯を充電器に繋いでベッドに横になった。

今思えば父さんに話がずれてくれて助かった。あのままだと俺が被害をこうむることになったし。

わて、やることもないし本でも読むかな…。

いつもして今日も色々なことがあつたが平和に終わってよかったです。

とこつか高校生が平和な一日を思うなんてなあ…。

第十九話：一言で始まる～後編～（後書き）

今回は久しぶりに父親が登場しました。

最近はどういうラストにするかで悩んでおります…。

実際のところ、俺はこの作品をほほ思いつきでやつちやつたのラストまでの大まかな構想が練れません。

しかもこの辺の田舎系の作品のラストなんて全然知識がありません。

⋮。

BRISINGRさん、やまだんさん、paroraramuさん。『
感想ありがとうございました。

今回は感想だけではなく勉強のコツまで教えていただいたりもした
ので感謝感謝です！

これからも応援よろしくお願いします。

「感想、『指摘は隨時受け付けております。遠慮なくどうづか。』

第一十話・突然のキス（前書き）

最近は学校行事関連で忙しいので更新が滞ってしまつ…！
それよりこの作品もいつの間にやら12万PVを突破してました。
最近見てなかつたのでかなりびっくりしました。本当にありがとうございます。

第一十話・突然のキス

離婚した理由を聞いたり父さんの着信拒否の謎から数日がたつた。そして今日は日曜日。ほぼ全ての日本人は休日を謳歌しているだろう。

俺も休日を満喫しようと思つていた。でも…

「なぜこいつなの」

「早く早くー今日は久しぶりの休みなんだからーーー！」

「俺も休みなんですが…」

「知らないわよー分かつたらついて来るーーー！」

俺は休日だといふのに綾子さんに連れられて隣町まで来ていた。連れてこられた理由はいたつて簡単で単純。ただ拉致られただけだ。前回と同様に俺は公園に呼び出されたと思えば、「来たわね。じゃあ休みだし遊びに行くわよーーー」と言つて俺の手を掴んで走り出した。

そして氣づけばそこはもう電車の中、後戻りはできなくなつていた。

「ほらほら。ぼーっとしないで行くわよーーー！」

「まあ行くのは構わないんですが、いつたいどこに向かってるんですか？」

「遊園地。最近できたって噂を社内で聞いたのよ」

「…ああ、あそこですか

「ん? もしかして誰かと行ったことあるの? もしかして彼女だったりするのかな? ま、ないか」

「いや、まあ正解だつたりするんですけど…」

俺がそう言つた瞬間、綾子さんの足が止まつた。
いきなり止まつたのでコケそうになつたがなんとか耐えた。
そして俺が顔を上げると綾子さんはこちらを見ながら苦笑いをして
いた。

「え? や、やだな~」冗談は流すか適当にあしらつのがマナー?~?

「冗談じゃなくて本当ですよ。そつにえは連絡してませんでしたっ
け?」

俺がそう言つと綾子さんは下を向いてしまつた。
そして微かにだが体が震えている。

俺が声を掛けようとした瞬間、綾子さんが俺の胸ぐらを掴んでいた。

「あ、綾子さん? どう? 「聞いてないわよ…」そんなこと…
泣いてるんですか?」

ここは幸い人通りの少ない通りだったのでそんなに見られることは
なかつた。

だが通行人はいないわけではない。チラチラとは見られている。

「聞いてない…、聞いてないわよ…」

「えっと… とりあえずビーチで休みましょ！」

「話を変えないで。なんで知らない間に彼女なんているのよ… なんですよ…！」

「それに対しては答えが分かりませんよ…」

「じゃあ私の好意には気づいてた？怒らないから言って」

「…分かりませんでした」

「私だって好きじゃない男の子を連れ去りしたりしないわよ。で、彼女のことは好きなの？」

「はい。なんせ俺のこと好きになつて、告白までしてくれた子です」

「……私だって好きだったのに不公平よ。それなら…！」

「ちょー…? んむうー…?」

綾子さんが掴んだ手に力を入れたと思つと俺の顔の前には綾子さんの顔があつた。

そして俺は顔を離そうとするといつも頭を抑えられた。

俺は逃げることができず数秒の間ずっとキスをしていた。その間は俺にとって数分にも感じられた。

「ふはつーい、いきなりなにするんですか！！」

「……やつぱり離したくない。絶対に、絶対に私に振り向かせてあ

げるか、

「え？ それって「じゃあね。呼び出して悪かったわ」ちよ、待つ…」

俺が声を掛ける間もなく綾子さんは走つてどこかへ行つてしまつた。でも最後の一言を言つた後、綾子さんを見ると恐怖心が沸いたのはなんだ…？

第一十話・突然のキス（後書き）

今回は凄く短くてスイマセンでした。

とりあえず病んだ綾子さんを登場させたかっただけです。

そしてこの話の次からは綾子さんと宗佑、真央の登場が多くなると思します。

読み専さん。ご指摘ありがとうございました。

自分でも注意はしているつもりですがやっぱり抜けている部分もありますので助かりました。

これからも読んでいただければ幸いです。

「」意見、「」感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第一十一話・疑惑と仲違い？（前書き）

『氣づけば』の小説も一十話を超えたねえ。
……まあ更新速度で言えば遅い部類にはいるんですが。

第一十一話：疑惑と仲違い？

昨日の綾子さんに拉致されて色々あつた次の日、俺は学校に向かつていた。

すると前方に真央の姿が見えたので俺はそこまで走つていった。

「おはよっ。なんか元気ないかい？」

「 」

「お、おこ！」

俺が真央の横に立つて声を掛けると、驚いた顔をした後に走つて行つてしまつた。

いきなりのことだったので俺は呼び止めようとしたままで固まつてしまつた。

俺は知らない間に何かしたのか？

「おつす紫やん……ん? どうしたん?」

「あ、いや…。さつき真央に話しかけたら逃げられてな」

「逃げられた？なんでなん？」

「知るか。逆に俺が知りたい」

「……ん？ もしかしてあの噂か？」

「あの噂?なぜ噂と俺が関係あるんだ?」

「いや、その噂の中心が宗やんやねん」

噂の中心が俺?なにをしたんだ?

別に学校では田立つことはしていないが…。

「まあいい。その噂とやらを聞かせてくれ」

「えつとな、宗やんが昨日の昼過ぎに真央ちゃんじゃない女人の人とキスしてたって言つねん」

「なつ…!?

「まあ大半は宗やんがそんなことするわけないって言つとんねんけどな」

ま、まさかウチの学校のヤツが通つていたのか!?
いや、あのときに俺は通路が見えていたが知つてるヤツは通つてないぞ!?

「情報源は誰だ?今すぐ聞いただしたい」

「そんな無茶言つたらアカンで。人の噂も65日つて言つやん」

「75日だバカ。まあそれもひとつ手だな」

「バカつて言つた方がバカやねんで。それより真央ちゃんの誤解を解いてきいや」

「分かつた。あんがとな」

俺は学校に向かつて走り出した。

今思えば遅刻ギリギリなのに歩いている宇野はバカなんだろうな。

少し時間が経ち、今は一時限目が終わった休み時間。
俺は一旦散に真央の元に向かつた。

「おい。ちゅうと話いいか?」

「えつー?ー、こーけど…」

「じゃあ階段のとこまで行くぞ。ここじゃ人が多い」

「え、ちゅうー待つてよー!ー?」

俺は半ば無理やり、逃げられないよつて手をとつて階段まで向かつた。

一年の教室は校舎の上の階にあるので、俺は屋上の扉の前まで連れてきた。

「はあ…はあ…。そ、そんなに急いでどうしたの…?」

「簡潔に言つぞ。俺に対してなにか勘違いをしてるだら

「…ん？勘違いなんてしてないよ？」

「え、だつて俺が他の女人とキスをしたつて噂が…」

「キスしたの！？そ、宗たんヒドい…ヒド過ぎるよ…」

「え…？ちょっと待て「待たないよ！なんでもそんなことしたの…」…」
「ちょっと待つて！」

「ひや、ひや…」

俺の一喝でなんとか静かにできた。
さて、まずは朝のことから聞いていくか…。

「まずは、なんで朝逃げたんだ？」

「いきなり話しかけられてびっくりしたんだよ。そのときに体が勝
手に走つていっちゃった…」

「理性より体が動いたつてことか。野生児かよ

「や、野生児じゃないもん！それより宗たんの話の真相はどうなの

！」

「俺の話の真相はただの噂だ。気にする」とはない

「なんだ。よかつたあ～」

「俺はただ単に宇野のバカに惑わされただけつてことか…」

「でも宇野君には感謝だね」

「感謝？ アイツには感謝することはないぞ？」

「だつて宗たんは心配してくれたんでしょ？ それが嬉しかったんだもん！」

…いきなり妙に恥ずかしいことを言つなよ。

結局俺たちはそのまま教室に帰り、いつもと同じ学校生活を過ぎした。

第一十一話・疑惑と仲違い？（後書き）

今回も短いですね…。

次回は少し修羅場っぽい感じに仕上げてみる予定です。

天道 界理さん。『ご感想ありがとうございました。

感想にあつたお父さんの扱いをもつと雑にすると書いたのですが、

あれ以上雑にしても大丈夫なんでしょうか？

あれでも私はかなり雑に扱っているつもりなんですが…。

ご意見、ご感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第一十一話・拉致騒動再び（前書き）

最近は一ぐら寝ても寝たりないです……。
そして授業中に寝て怒られるという悪循環がある……。
とことで休みはずっと寝ます。

第一十一話・拉致騒動再び

朝の勘違い事件があつたりした放課後、俺と真央はいつも通り寄り添つて歩いていた。

俺の噂の件は完全に沈静化したわけではないが、笑顔でいてくれると気が楽になる。

「でね。今度放映の映画のチケットをげつとしたよー！」

「ん？ こりやホラー映画じゃないのか？」

「そだよー。別に私は怖くないから大丈夫だよん」

「そりや残念。ビビつた顔を見たかつたのに」

「えー、宗たん悪趣味だよー」

「そつか？別に悪趣味ではないと思うが」。

まあ好きな奴の色んな表情が見たいって言うのもあるんだがな。

俺たちはそんなことを話しつつ歩いていくと、前方に人影が見えた。しかし夕日の逆光のせいで本当に影しか見えない。

そしてその人影は俺たちに向かつて歩いてきた。

近づいてきた人影の正体は俺がよく知っている人物だつた。

「あら、こんな所で会うなんて奇遇ね。宗佑君」

綾子さんはそう言つて笑みを浮かべた。

でも、俺から見たらその笑みには少しの恐怖を覚えた。

「あ、奇遇ですね。綾子さん」

「んえ？宗たん、この人はだあれ？」

「」んにちは彼女さん、私は白江綾子よ。よろしく」

なんだか彼女のところのアクセントが強かつたような……。
そしてなんだ……？」のなんとも言えない気持ち悪い感覚は……。

「ねえ宗佑君。これから時間空いてる？」

「はあ……、俺は大丈夫ですけど……」

「私は別にいいよ。じゃ、また明日ね～」

そう言って真央は帰つていった。

そして残つたのは俺と綾子さんだけになつた。

「ふふつ、やつと一人になれたわね……」

「で、どうしたんですか？わざわざ待つてまで」

「そうね。長くなるかもしれないし公園で話しましょ

「せつですか。なら行きましょつか

改めて気がついたがここは公園の近所だつた。

なら綾子さんがここにいる理由が納得できた気がする。

俺たちは公園のベンチに座つて話をした。

話の内容は意外にも恋愛絡みの相談だった。

まあその相談も友人からされたものらしいが…。

「で、その友人の彼氏が他の子と付き合つたらじいのよね」

「あー…、結構面倒ことになつてるんですね」

「そうなのよ。でね、その女の子は彼を略奪しようかつて言つてるのよ」

「そ、うなんですか。でも略奪なんて面倒になるだけじゃないですか？」

「そうよね…。もし、彼の方がその子を選んだらどうする？」

「それは…、付き合つてる人がいる状態では難しいのでは？」

「そ、う…、ありがとね。なんとか答えがでたわ」

「答え? アドバイスじゃなくてですか?」

「ええ。私の答えはこう」

そう言つて綾子さんは俺の背後に回つて首に何かを押し付けた。その瞬間。俺の視界は激しく揺らぎ、全身の力が抜け、俺は地面に倒れた。

だんだんと薄れていく意識の中で見えたものは、綾子さんと青白い電気を放つスタンガンだった。

第一十一話・拉致騒動再び（後書き）

今回は綾子さんの理性がブツ飛んでますね、まさかこんな展開になると作者も思ってませんでした。
気がつくといこんな感じに……。

「意見」「感想は隨時受け付けております。遠慮なくどうぞ。」

第一二三話・脱出と決意

「うん……？」私は、ドアだ？電気もつこないし……。

俺がそばにあるカーテンの隙間から外を見ると景色は黒に小さい光、夜だった。

ほんの少しの月明かりを頼りに辺りを見渡すと、机に本棚にタンスといった家具が見える。

そして俺が寝転んでいるのはベッド。普通の部屋か？

「……なんで俺はこの部屋に？」

俺が疑問を呟くと部屋の扉が開いた。

影でしか見えないがおしゃべく女性。片手になにか持っている？

「あ、やつと『貰ついた？』

「その声……綾子さんですか？ならこの部屋は……」

「ここは私が借りている部屋の一室よ。どうしてでしょう？」

「インテリアは分かりませんよ」

「そうじゃないわよ。専門的に見るんじゃなくて宗佑君から見てよ

「まあ、いいんじゃないですか？」

「あら嬉しい。お礼にハグしちゃう」

「え？ ちよ、待ってください」「ダメ」「いだあ……」

綾子さんが近づきながら手に持っているものを俺の腹部に当たった。
そしてカチッという音と共に俺の体に激痛が走った。

「私に反抗したら…お仕置をするから」

「スタン…ガン…？思い出した…！俺はスタンガンで氣絶せられ
て…」

「思い出しちゃった？」

「……悪ふざけで済むレベルじゃないですよ。これは」

「悪ふざけじゃないわ。私は本気、本気で宗佑君を私の物にする気
よ？」

「俺は所有物ではありません。帰らせてください」

「ふう～ん。また、痛いのがいいの？」

「スタンガンは嫌に決まつてますよ。だから、力づくですが…！」

「え…？ きやあ…！」

俺は綾子さんにベッドにあつたクッショングを盾に突撃した。正直す
げえ怖かった。

本気ではないので綾子さんは尻餅をついただけで済んだが、俺は一
気に玄関に行つて靴を履き、マンションの廊下を全力疾走した。
そしてマンションのロビーから外に出て、しばらくは家に向かって
走った。

じまく走つてから俺は疲れたので歩く」とした。

「……ん？ 宗佑か？ こんな時間までなにをしてるんだ

「……ん？ 宗佑か？ こんな時間までなにをしてるんだ

「あ、葵ねえ……」

俺は安心感と恐怖感の二つが感極まつて葵ねえに抱きつこうとした。

しかも情けなく涙を流しながら。

「あ、宗佑……ど、ど、どうしたんだー？」

「会いたかった……会いたかったよ……」

「なあ……そ、宗佑りじへなーぞー！……泣いてるのか？」

「ゴメン本当……。ステッキは後で弁償するよ……」

「それはこーわ。ド、なにがあつたんだ？」

「……実は

俺はさつき遭遇した出来事をそのまま葵ねえに語つた。道端だったが関係なく、俺は真実をそのまま言つた。

「なるほどな。…………綾子の奴……」

「やうだ。」のことは裁判沙汰にしないでほしにんだ

「……どうしてだ？」

「いや……綾子さんが普通なら、普通ならあんなことはしないと思うんだ。何かがキッカケでああなつたんだと思つし……」

「まあ……そうだな。確かに素の綾子は能天気に笑つてゐる奴だ」

「うん。だから、俺を誘拐したつてことはキッカケは俺だらうし、俺が話をつけるよ」

「そうか。なら今日は帰るぞ、明日は学校をサボれ。そして一日かけても説得するとい」

「……ありがと」

俺と葵ねえは家に向かつて歩き始めた。

そう言えば晩飯はどうなつたんだろ？……まあ、美咲ねえと凜は料理できるし。

大丈夫……かな？大丈夫だと信じたい。

第一二三話・脱出と決意（後書き）

今回はかなり遅れての投稿でした。

まあ色々と事情がありまして…、勉強は勿論ですが母方のおじいさんがヤバいんですよね…。

残りは一週間ぐらいいつて言われたんで、気持ち的にも執筆に向かなかつたり。

今回は書き溜めてた。と書くより少しづつ書き足していくものです。

いきなり文章の感じが変わつたりしてなればいいんですが……。

いちじょん。じん感想ありがとうございました。

今日ログインすると感想があつたので書く気になれました。

色々な意味ありがとうございました。

じん意見、じん感想は随时受け付けております。遠慮なくどうづね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044r/>

朝山家の長男のとある物語

2011年9月13日13時48分発行